

仙台市文化財調査報告書第185集

# 今 泉 遺 跡

——第3次発掘調査報告書——

1994年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第185集

# 今 泉 遺 跡

——第3次発掘調査報告書——

1994年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

## 序

日頃より仙台市の文化財保護行政にたいしまして多大のご協力をいただき、誠に感謝にたえません。

近年、今泉地区のみならず市周辺地域は都市化による生活環境が大きく変わりつつあり、急速に開発、市街化が進んでいるところであります。こうした中、開発に伴う発掘調査が行われ、先人の生活の様子が解明されつつあるところですが、遺跡の保存に関する問題があることも否めないところであります。

さて、今回この遺跡内で宅地造成が計画され第3次となる発掘調査を実施いたしました。この地は古くより「須田玄蕃の居城 今泉城」があった所として周知されていましたが、調査により中世の城館に関する資料、さらに古く弥生時代から平安時代の貴重な考古資料が発見されました。

このような発掘調査によって得られた多くの成果は、地域の歴史を知るうえで貴重な資料であり、今後のまちづくりや学校教育のなかで、十分に活かしていきたいと考えております。

最後になりましたが、調査にあたりご指導・ご協力くださいました皆様に対し、心より感謝申し上げます。

平成6年3月

仙台市教育委員会

教育長 坪山繁

## 例　　言

1. 本報告書は、宅地造成に伴う今泉遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書掲載の図1は国土地理院発行の5万分の1「仙台」を複製使用した。
3. 本書中の土色は「新版標準土色帖」(小山・竹原:1973)を使用した。
4. 本文・実測図の方位は真北を基準とし、高さは標高値である。
5. 石製品の材質は東北大　蟹沢聰史氏に鑑定していただいた。
6. 火葬骨は札幌医科大学　石田　肇氏に鑑定を依頼している。今回、観察される事柄をとり急ぎ報告していただいた。
7. 陶器・磁器類の産地同定は文化財課　佐藤　洋が行った。
8. 土師器内外面に塗られた赤色の顔料は分析を行っておらず種類が不明であるが、ここでは「赤彩」として表記した。
9. 本書の作成にあたり、松井一明・比田井克仁両氏より古式土師器に関する資料及び助言をいただき、中野晴久氏よりSK8出土の常滑の壺に関する助言をいただいた。
10. 本書の執筆・編集は渡部弘美があたった。
11. 本遺跡の出土遺物は仙台市教育委員会が一括保管している。

# 目 次

序

例 言

I.はじめ	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査要項	1
II. 遺跡の位置と環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
III. 調査の方法と経過	7
IV. 基本層位	8
V. 検出遺構と出土遺物	9
1. III層面検出遺構	9
1) 柱穴群	9
2) 土坑	9
3) 溝跡	10
4) 火葬遺構	12
2. IV層面検出遺構	12
1) 土坑	12
2) 溝跡	14
3) 土器埋設遺構	18
VI. 出土遺物について	19
VII. 今泉遺跡出土火葬骨について	41
VIII. 総括とまとめ	42
1. 遺構の構成について	42
2. SK 5 土坑出土の土師器について	44
3. まとめ	45

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経過

仙台市南東部、若林区東部一帯は、太平洋に向かい続くかぎり田畠が広がる穀倉地帯となっている。近年、宅地開発・道路網整備に伴い、周辺環境は少しづつ変貌をとげている。当遺跡が所在する今泉久保田地区も例にもれず宅地化が進み、田畠が散見する状況となっている。

今泉遺跡は昭和54年・56年に今泉城跡として2回の本格的調査を実施している。中世の城館跡を中心とするが、縄文時代から近世にわたる複合遺跡であることが確認され、以後、名称を今泉遺跡と改称している。

平成4年、地権者 遠藤崇氏より宅地造成の申請が提出された。申請地は前回調査の南側隣接地にあたり、多種の遺構・遺物の発見が予想される地点であった。協議の結果、事前調査を行うことになり、平成5年6月7日より記録保存を目的とした調査を実施するに至った。

### 2. 調査要項

遺跡名稱：今泉遺跡（仙台市文化財登録番号C-507）

所在地：宮城県仙台市若林区今泉字久保田87他

調査事由：宅地造成工事

調査対象面積：約1,700m<sup>2</sup>

調査面積：約150m<sup>2</sup>

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会文化財課

担当職員：渡部弘美 竹田幸司

調査期間：平成5年6月7日～8月12日

整理期間：平成5年11月1日～平成6年3月25日

調査協力：遠藤崇 和野総合事務所

調査参加者：佐藤久栄 曽根ちよ子 深瀬嶺子 芳賀節子 赤間淳子 吉田アキヨ

伊藤はるよ 烏畑きみえ 峯岸安好 高橋喜八 高橋節子 太田君子

佐藤とき子 植野幸子 伊藤房江 泉美恵子

整理参加者：太田 佐藤 植野 鈴木幸子 小山つるよ 西條裕子 佐々木理枝

## II. 遺跡の位置と環境

### 1. 地理的環境

今泉遺跡は仙台市の南東部、若林区今泉字久保田に所在する。JR 仙台駅東南約 6.5kmの地点にあたり、西方約 1.5km地点では名取川と広瀬川の合流点がみられる。周辺地形を概観すると、奥羽山系の面白山地を源とする名取川が高館・青葉山丘陵を開析東流し、七北田・青葉山丘陵を開析東流する広瀬川が上述の地点で合流し、太平洋に注いでいる。両河川とも中流域で段丘を発達させ、下流域においては広大な沖積地を形成している。当地域は仙台平野のなかの宮城野平野の中央部に位置するが、周辺には自然堤防・後背湿地・旧河道も観察され、海岸部には数列の浜堤もみられる。

現在、今泉周辺は都市化の影響のもと古来の姿は失われつつあるが、周辺集落は自然堤防・浜堤上に営まれており、点及び列状に集村形態が観取され、他の地点は水田・畠等に利用されている。当遺跡はこの自然堤防上に位置する。標高は3.5m前後で、地形的にはほぼ平坦面であるが、南側に向かいやや低くなる傾向がみられる。宅地化が進み旧地形の把握は不能となってしまったが、以前には城館の堀跡と考えられる凹地などが部分的に確認されていた。

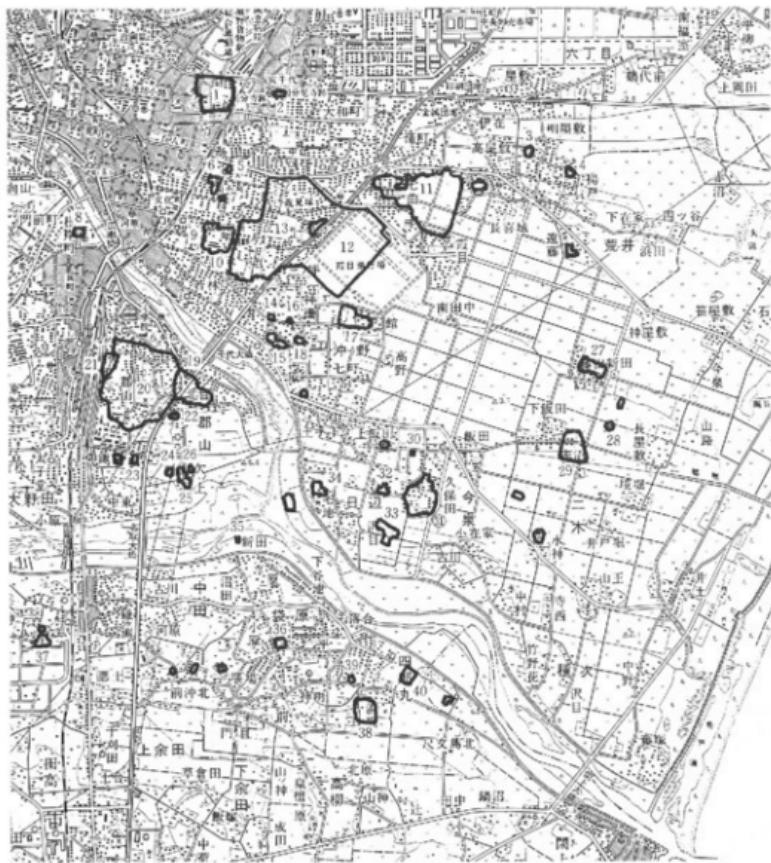
### 2. 歴史的環境

名取川及び広瀬川周辺地域には、当今泉遺跡をはじめとし各時代の遺跡が数多く分布している。ここでは広瀬川左岸の地域を中心に遺跡を概観してみる。

縄文時代の遺跡は、高田B遺跡及び今泉遺跡の2例のみとなっている。高田B遺跡では後・晩期の土器が出土し、後期の住居跡が1軒発見されている。高田B遺跡は新しく周知された遺跡で、今後当時期の遺構・遺物が周辺で発見される可能性は高いが、地理的要因からも生活の場として確立するのは弥生時代以降のことと考えられる。

弥生時代の遺跡には、南小泉・高田B・中在家南・藤田新田・今泉遺跡がある。南小泉遺跡は、昭和10年代図ノ目飛行場拡張工事の際に多量の遺物が出土し周知された遺跡である。その後の調査で弥生時代から近世いたる遺構・遺物群が発見され、範囲・内容等市を代表する有数の遺跡となっている。中期の合口土器棺等が検出されてはいるが、未だ不明な点が多い。高田B遺跡では中期の水田跡、河川跡から中期の土器群と共に農具等の木製品が出土している。中在家南遺跡では中期の土坑墓・土器棺墓が検出され、河川跡からは同期の土器と共に多種にのぼる木製農具等が出土している。藤田新田遺跡では土器と共に石庖丁・石斧が出土している。

古墳時代の遺跡には、遠見塚・法領塚・猫塚・下飯田薬師堂古墳等の高塚古墳、南小泉・中在家南・藤田新田・今泉遺跡がある。遠見塚古墳は前期末～中期初めの全長約110mの前方後円墳で市内最大規模をもつ。割竹形木棺が2基確認され、管玉・小玉・要飾が出土している。法



遺跡名	発見原立地	時代	遺跡名	発見原立地	時代
1 駿東國分寺	寺内・神積地	奈良・平安	21 西古墳跡	古墳地	李生・古墳
2 駿東國分寺附寺	寺内・神積地	奈良・平安	22 大久保跡	自然堤防	織田・信長・平安
3 伊豆道	伊豆道	奈良・平安	23 地下道跡	自然堤防	大和・奈良・平安
4 犬山城跡	犬山城	平安	24 大ノ上日遺跡	無名跡	自然堤防
5 佐久間城跡	佐久間城	古墳	25 大ノ上日遺跡	無名跡	自然堤防
6 三種御用道路	三種御用道路	平安	26 大ノ上日遺跡	栗原跡	自然堤防
7 驚鹿古墳	古墳地	古墳	27 新御田遺跡	栗原跡	李生・古墳
8 伊摩古墳	古墳地	古墳	28 下今泉跡	古墳地	李生・古墳
9 岩林城跡	岩林城	古墳地	29 下今泉跡	栗原跡	栗原・李生・中世
10 岩林城内古塚	古塚地	古墳	30 梅原古墳	古墳	中世
11 伊豆東港古墳	伊豆東港	古墳	31 今川古墳	古墳	中世
12 木小原遺跡	無名跡	神宿地	32 高山古墳跡	栗原跡	自然堤防
13 連続古墳	古墳地	古墳	33 西古墳跡	栗原跡	自然堤防
14 伊伊上遺跡	伊伊上	自然堤防	34 丘陵古墳	栗原跡	李生・平安
15 伊伊上遺跡	伊伊上	自然堤防	35 大原山古墳	古墳	中世
16 伊伊上遺跡	伊伊上	自然堤防	36 中田山古墳	無名跡	自然堤防
17 伊伊上遺跡	伊伊上	自然堤防	37 安久山古墳	栗原跡	自然堤防
18 中體西武路	無名跡	中世	38 戸内古墳	栗原跡	自然堤防
19 北日古路	坂	古墳	39 城丸古墳	古墳	自然堤防
20 鶴山古路	官塚	自然堤防	40 朝氣山古墳	栗原跡	自然堤防

図1 今泉道跡周辺の遺跡



図2 調査地点、周辺地形

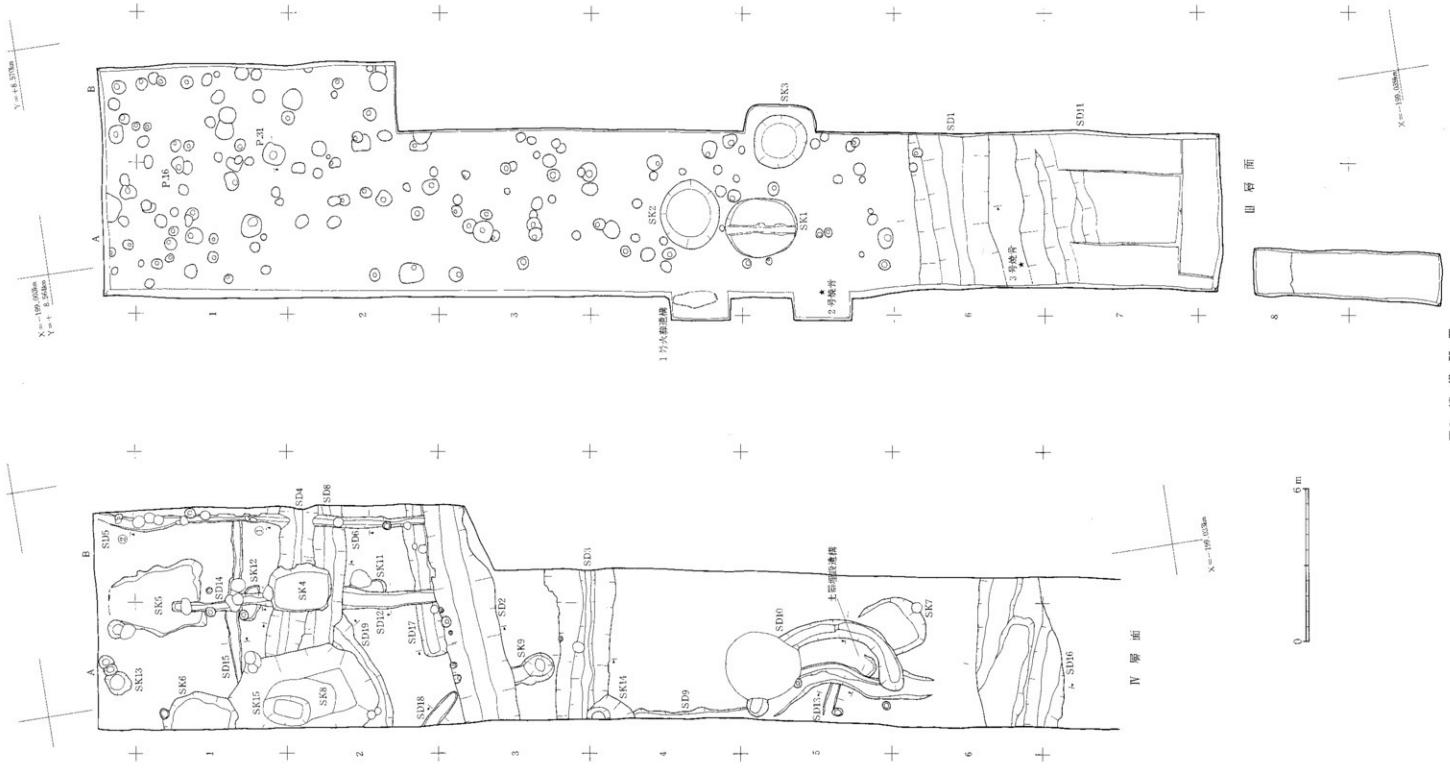


圖3 畫構配置

領塚古墳は横穴式石室をもつ徑32mの後期の円墳である。南小泉遺跡では員数の差はあるが古墳時代全般にわたる集落跡が各地点で確認され、当時期の中心地域の一つと考えられる。中在家南遺跡では河川跡から土器群と共に多くの木製農具が出土し、前時代から続く生業資料が確認された。藤田新田遺跡では前期から中期にかけての集落跡が確認された。住居跡と共に方形周溝墓・水田跡が発見されている。なお、古墳時代終末7世紀後半には、広瀬川・名取川合流点北西部に郡山遺跡が造営される。陸奥国府多賀城以前の官衙で、陸奥国統括の施設と考えられ、7世紀末には付属寺院も建立される。

奈良時代の遺跡は陸奥国分寺・尼寺・神棚遺跡と確認例は少ない。同寺の建立等関連集落の存在は十分に推察され、今後に期待される。神棚遺跡は遺構・遺物の検討から律令機構末端の施設と考えられている。

平安時代の遺跡には南小泉・今泉遺跡があるが、南小泉遺跡が再び中心地域となるようで数多くの集落が形成されている。掘立柱建物跡が併設され石帶が出土する集落もみられ、有力層の存在が考えられる。

中世の遺跡には、沖野城跡・今泉・南小泉・下飯田・高田B遺跡がある。沖野城跡は栗野大鷦の出城といわれ、堀跡・土星が確認されている。南小泉・下飯田・高田B遺跡では堀で区画された建物跡が検出され屋敷跡と考えられている。高田B遺跡では水田跡も発見されている。

なお、起源に関しては不明であるが、当地区周辺には真北方向を基準とする一町四方の条里型土地割が広い範囲にわたり観察された。「二の坪」・「三の坪」などの地名が残るが、現在はほぼ煙滅している。

### III. 調査の方法と経過

今回提出された開発予定地は当遺跡の中央部南側にあたる。現況は更地及び畠地である。開発対象地は約1700m<sup>2</sup>にのぼるが、最終的には道路敷部分を中心とした約150m<sup>2</sup>の調査を行った。調査区として東西6m・南北29mのトレンチを設定したが、東側部に搅乱がみられ調査区から削愛している。調査区に4m単位のグリッドを設定し、南北軸に算用数字・東西軸にアルファベット文字を用いた名称とした。なお、1区北側の杭(A・B)は平面直角座標系Xにおける座標値(A:X=-199.004138km, Y=+8.562646km B:X=-199.005361km, Y=+8.570545km)を計測している。

調査は黒褐色土(III層)の上層まで重機で排除し遺構確認を進めた。基本層はI~IV層まで確認し、断面観察を含めII・III・IV層で遺構を確認している。遺構はほぼ全域で検出されるが北側部にやや集中する傾向がみられた。検出遺構には柱穴・溝跡・井戸跡・土坑等がある。中世の遺構が大半を占めるが、中世以前の遺物が堆積土に多く含まれているのが特徴的である。遺

物は弥生時代から近世にいたる種々のものがあるが、弥生土器及び土師器の量が特に多い。なお、調査最終段階で調査区の南側に小トレンチを設定し、南端部の溝跡の規模を確認している。調査は8月12日に終了した。

#### IV. 基本層位

表土から最終遺構確認面まで大別で4枚(I~IV)の層を確認した。全体的にシルト質の土壤であるが、IV層から下部は砂質土壤に暫時変化して行く。遺構はIII層・III'層・IV層の三面で確認した。以下、各層の特徴を略述する。

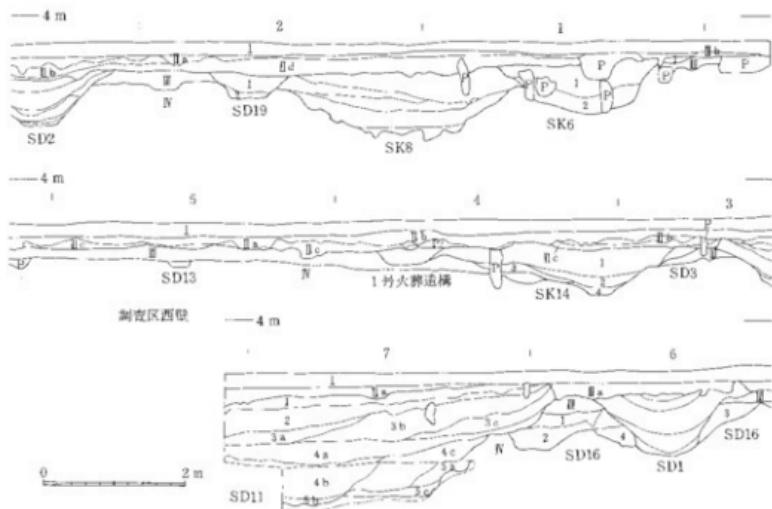
I層=畑地の現耕作土で、層厚20cm程である。

II層=褐色のシルト層でa~dに細分した。層厚は全体で25cm程である。IIa層はほぼ全域に分布するが層下面に凹凸がみられ旧耕作土の可能性がある。IIb・IIc層は削平のためか部分的に存在する。IId層は調査区北側に分布するが、SD2溝跡上部でレンズ状に落ち込んでいる。

III層=黒褐色のシルト層で、層厚20cm程である。調査区全域に分布し、弥生時代から中世の遺物が多量に含まれる。層上面でピット及び柱穴・土坑・井戸跡を確認している。

III'層=2区東壁部分のみで確認した。分布域は不明である。III層の下部に位置し、褐灰色のシルト層である。層厚は15cm程である。SD8溝跡の確認面となっている。

IV層=黄橙色の砂質シルト層で、今回調査の地山面となる。



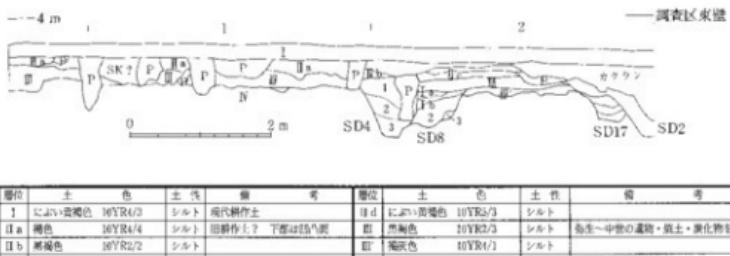


図4 調査区基本層位

## V. 検出遺構と出土遺物

検出遺構には土器埋設遺構1基・土坑11基・井戸跡3基・溝跡18条・火葬遺構1基・柱穴及びピットが多数ある。土器埋設遺構と土坑・溝跡の一部を除き中世に属する遺構群で構成される。柱穴・ピット群は調査区北側にやや集中する傾向がみられるが、他の遺構は調査区全域に散在している。遺物は整理箱20箱程の量で弥生時代から近世にいたる各種のものが出土している。土器類が主体を占めるが弥生土器及び土師器(古墳時代)の出土量が特に多い。遺構は基本層のIII層・IV層面で検出したが、壁面観察でIV層面検出遺構(中世の時期のもの)はIII層面より掘り込まれ、SD 8溝跡はIII層下部の褐色層(III'層)が検出面となることが判明した。遺構の確認状況・III'層の存在からも本来III層は分層されるものと考えられたが調査時においては明確な線引きは出来なかった。遺構の記述は検出順に行う。

### 1. III層面検出遺構

#### 1) 柱穴群

調査区の1~5区内においてピット・柱穴を多数検出した。円形及び方形のプランをもつもので、大半は径30cm程の円形のもので、方形のものは一辺60cm程である。殆どのものに径10~15cm程の円形の柱痕跡が認められる。埋土は土色の違いで大きく3種に分けられるが、各層から掘り込まれたピット・柱穴が混在し分離はむずかしい。ほぼ同一間隔で並ぶ柱穴が認められ物跡・塙跡の存在は十分に推察されたが、調査区の制約等も含めあえて組み合わせは控えた。遺物として土器類、陶器、青磁、古銭、白が出土している。

#### 2) 土坑

**SK 1 土坑** 5A区に位置する。平面形は南北軸がやや長い梢円形である。規模は長軸193cm、短軸157cm、深さ48cmを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は方形である。底面はほぼ平

坦で、底面中央部に幅約20cm、深さ6～8cmの南北方向に延びる1条の溝が掘り込まれている。北壁では30cm程壁面に入り込んでいる。堆積土は3層確認した。黄褐色系のシルト層である。1・2層はレンズ状堆積となるが、3層は灰黄褐色と黄橙色の混成層で一時期に埋まった状況を呈する。上部構造物の埋没か人為堆積であるかは不明である。遺物は各層からまばらに出土している。種類として弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器擂鉢、磁器皿？、陶器土瓶の口、茶臼、骨片がある。

**SK 2 井戸跡** 4A区に位置する。素掘りの井戸跡である。平面形はやや東西軸が長い梢円形である。規模は上面径156～182cm、底面径120～128cm、深さ233cmを計る。断面形は上方がやや開いた長方形で、形状は円筒形である。堆積土は5層まで確認した。全体的に黒色系のシルト層である。2層は基本的に灰の層で、3層にも灰が互層となっている。4層には植物遺体がレンズ状に堆積し、下層はグライ化がみられる。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、陶器皿・壺・土瓶蓋、青磁碗、土師質土器擂鉢、瓦質土器香炉、針状鉄製品、臼(粉挽き・茶)、碟、桶の底板、木片、シジミ貝殻がある。粉挽き臼はSD11のものと接合関係にある。底面での出土はない。

**SK 3 井戸跡** 5B区に位置する。索掘りの井戸跡である。平面形はほぼ円形である。精査中に壁が崩落し完掘はしていない。規模等不明な点があるが、上面径136～142cm、深さ約250cmを計る。断面形は上方がやや開いた長方形で、形状は円筒形である。堆積土は5層まで確認した。黒褐色系のシルト層である。4・5層ではグライ化がみられる。遺物には土師器、須恵器、陶器皿・鉢？、磁器碗、瓦質土器火鉢、木製の椀・箸、骨片がある。

### 3) 溝跡

**SD 1 溝跡** 6区に位置する。東西方向に直線的に延びる。底面での軸方向はE-3°-Sである。北辺東側でピットに切られている。規模は上端幅187～223cm、下端幅26～61cm、深さ74～82cm、確認長396cmを計る。断面形は逆台形である。底面高に大きな差はみられない。堆積土は6層確認した。上層は褐色系のシルト層で、2・4層では炭化物が顕著にみられ、最下層には砂質の粘土がみられる。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、陶器壺？、白磁碗、土師質土器鉢・擂鉢、瓦質土器火鉢？、碟がある。土師質土器擂鉢はSD11・2のものと接合関係にある。

**SD11 溝跡** 7区を中心に位置する。東西方向に直線的に延びている。北辺の軸方向は上端でE-3°-Sである。南辺確認のため8・9区に小トレンチを設定し上端のみの確認を行った。規模は上端幅約7m、深さ約1.6m、確認長約4mを計る。断面形はゆるい逆台形を呈すると考えられる。底面高に大きな差は認められない。堆積土は大別で5層、細別で11層確認した。上層は黄色系のシルト層で、下層は黒色系の砂質シルト層となり、最下層ではグライ化がみられる。2層では部分的に灰の層がみられ、炭化米が多量に含まれていた。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、陶器皿・鉢・小壺・天目茶碗・梅瓶・甕、青磁碗、土師質土器皿・鉢・擂鉢、小刀、

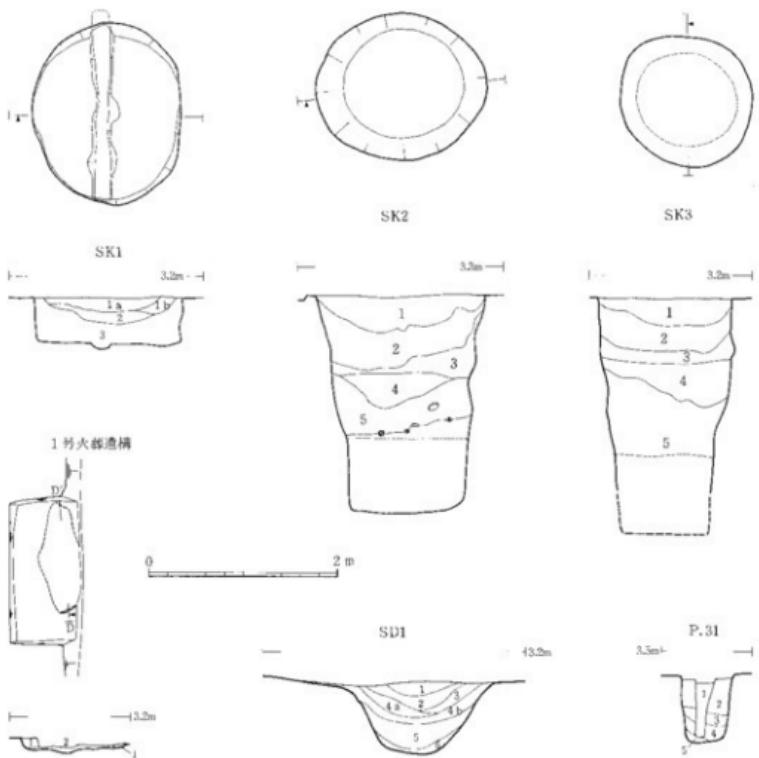


図5 田畠面検出遺構

遺構名	層位	色	質	性	質	考	遺構名	層位	色	質	生	質	考
SK 1	1 a	褐色	HTR3/1	シルト	褐色粘土に含む		SD 1	5	灰白色	HTR2/1	粘土	中中砂土	
	1 b	こめ・黄褐色	HTR4/0	シルト	粘性粘土でありしまりあり		6	褐色	HTR3/1	砂質粘土			
	2	褐色	HTR4/2	シルト	粘性粘土でありしまりあり		7	灰褐色	HTR4/2	シルト	褐色粘土を含む少		
	3	灰褐色	HTR4/2	シルト	粘性		8	灰	HTR2/1	灰	灰化物・灰土の層	若干多量に含まれる	
SK 2	1	灰褐色	HTR3/2	シルト	中等程度の塑性		9	褐色	HTR2/3	シルト	褐色		
	2	褐色	20T3/1	シルト	基本的には層1層2層で層をブロックで含む		10	褐色	HTR3/2	シルト	褐色	褐色土	
	3	褐色	10T3/2	シルト	少層シルト		11	褐色	20T2/2	シルト	タ		
	4	褐色	10T3/2	粘土	粘性の層の出現		12	褐色	20T2/2	シルト	タ		
SK 3	1	褐色	10T3/2	シルト	中等程度の塑性・浮遊漂浮物質を含む		13	灰褐色	HTR5/8	砂質シルト	タ		
	2	褐色	20T3/1	シルト	少層シルトに埋没漂浮物質を含む		14	灰褐色	2.3T4/2	シルト	泥炭化物	泥炭化物	
	3	褐色	10T3/2	シルト	灰變漂浮土・漂浮物質を含む		15	褐色	2.3T3/1	シルト	灰化物	泥炭化物多量に含む	
	4	褐色	10T3/2	粘土	褐色土・灰變漂浮土を含むブロックで含む		16	灰褐色	2.3T3/1	シルト	灰化物	泥炭化物	
SD 1	1	褐色	10T3/2	シルト	こめ・褐色土を含む少		17	灰褐色	2.3T4/2	シルト	泥炭化物	泥炭化物	
	2	褐色	10T3/2	シルト	褐色粘土ブロックに少層を含む		18	褐色	2.3T3/2	シルト	泥炭化物	泥炭化物	
	3 a	こめ・褐色	10T3/4	シルト	褐色土を含む少		19	褐色	2.3T3/2	シルト	泥炭化物	泥炭化物	
	3 b	褐色	HTR6/0	シルト	西側の丸土を含む少		20	褐色	2.3T2/1	シルト	泥炭化物	泥炭化物	
SD 1	4 a	褐色	HTR6/1	シルト	西側丸土を含む少		21	グリーン	2.3T2/2	シルト	泥炭化物	泥炭化物	
	4 b	褐色	HTR6/1	シルト	西側丸土を含む少		22	グリーン	2.3T2/2	シルト	泥炭化物	泥炭化物	
	5	褐色	HTR6/1	シルト	西側丸土を含む少		23	グリーン	2.3T2/2	シルト	泥炭化物	泥炭化物	
	6	褐色	HTR6/1	シルト	西側丸土を含む少		24	グリーン	2.3T2/2	シルト	泥炭化物	泥炭化物	

釘、鉄？、毛抜？、環状鉄製品、鉄滓、古錢、磁石、白(粉挽き・茶)、礫、瓦、土鈴、棒状土製品、漆器椀・曲物・木片がある。

#### 4) 火葬遺構

**1号火葬遺構** 4区西壁に位置する。プラン西側で溝状の落ち込みに切られ、SK14を切っている。焼土・炭化物の範囲から推定して、平面形は長方形と考えられる。規模は長軸114cm、短軸47cmを計る。南壁は焼土壁で、深さ13cmを計る。断面形は方形と考えられる。埋土は2層確認した。1層は灰黄褐色のシルト層で、2層は黒色の灰・炭化物・焼土の層で、層中より焼けた骨片が多量に出土している。焼土塊は南壁のみにみられ底面では確認されなかった。遺存が不良で墓としての性格を持ち合わせるものかは明らかでない。土器類等の出土はない。

**2号・3号焼骨出土地点** 2号は5区西壁部、3号は6区西壁部に位置する。焼面が確認されず焼土・炭化物・骨片が集中する。攪拌及びSD11溝跡構築時に破壊をうけた火葬遺構と考えられる。

#### 2. IV層面検出遺構

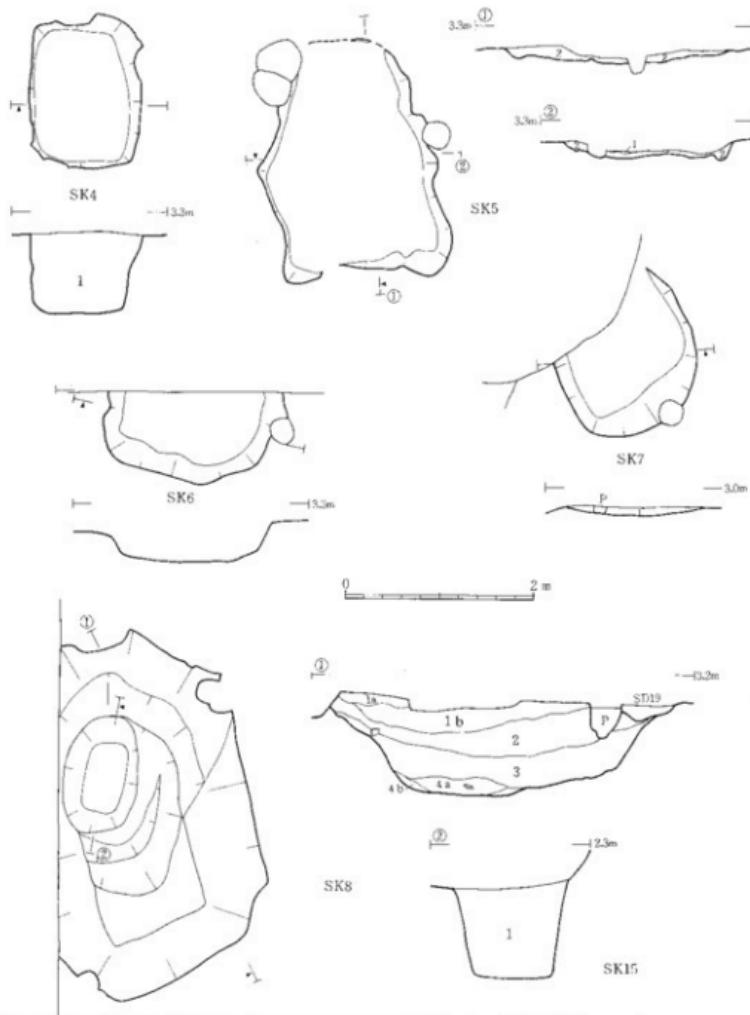
##### 1) 土坑

**SK 4 土坑** 2B区に位置する。平面形は隅丸の長方形である。規模は長軸165cm、短軸125cm、深さ85cmを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は方形である。底面はほぼ平坦である。ピットに切られ、SD 4・8を切っている。堆積土は1層のみの確認で、IV層をブロックに含む黒褐色土である。一時期に埋まったもので状況から人為堆積と判断される。土師器・須恵器・刀子が出土している。

**SK 5 土坑** 1区中央部に位置する。全体的に遺存が不良である。北側部は削平のため壁が不明確であるが底面の勾配から推定した。平面形は長方形を基調とする不整形である。規模は長軸推定244cm、短軸191cm、深さ最大で19cmを計る。断面形は皿状で壁はゆるやかに立ち上がる。底面には浅い凹凸がみられる。ピット及びSD14に切られている。堆積土は2層確認した。黒色のシルト層で、2層及び底面から土器類が数多く出土している。遺物には土師器壺・壺・壷・台付壷・瓶、土錘・弥生土器片があり、壺・壺には赤彩されたものがある。検出状況から判断して一括廃棄されたものと考えられる。

**SK 6 土坑** 1A区西壁に位置する。平面形は梢円形と考えられる。規模は南北軸191cm、東西軸91cm以上、深さ最大で41cmを計る。断面形は立ち上がりのゆるいU字状で、底面は浅い掘鉢状となる。ピットに切られ、SK 8を切っている。堆積土は2層確認した。黄褐色系のシルト層である。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、釘、馬齒がある。

**SK 7 土坑** 6A区に位置する。平面形は隅丸の方形と考えられる。規模は東西軸150cm、南北軸155cm以上、深さ最大で8cmを計る。断面形は浅い皿状である。ピット及びSD10に切られてい



遺構名	位臵	色	調	性質	備考	遺構名	位臵	色	調	性質	備考
SK 4	1 黒褐色	10YR2/3	シルト質粘土上	IV層をブロック状に含む		1 a	赤褐色	10YR2/7	シルト	IV層を多く含む	
	2 濃赤	10YR2/1	シルト			1 b	緑褐色	10YR2/7	シルト	灰との混在	
SK 5	1 黄褐色	10YR2/1	シルト	やや砂質 IV層が多量に混じる		2 黒色	10YR2/1	灰		赤褐色土が混じる	
	2 淡黄・黄褐色	10YR4/3	シルト	炭化物少量含む		3 紫褐色	10YR2/2	砂質シルト			
SK 6	1 淡青褐色	10YR4/2	シルト	赤褐色土小ブロック含む		4 a	黑色	20YR2/1	砂質シルト	ややグリ化	
	2 淡褐色	10YR3/3	粘土質シルト	IV層をブロック状に含む炭化物多量に含む		4 b	黑色	10YR2/1	砂質シルト	紅茶・少セブロッタに含む	
SK7	1 墓場	10YR2/3	粘土質シルト	IV層をブロック状に含む		SK15	1 黑色	10YR2/2	砂質シルト	赤褐色にグリ化	

図 6 IV層面検出遺構 (1)

る。堆積土は1層で暗褐色の粘土質シルト層で炭化物を多量に含んでいる。遺物には弥生土器、土師器がある。

**SK 8 土坑** ピット・SK 6・SD19に切られ本来の形状が不明であるが、底面及び東壁の状況から判断して、平面形は長方形を基調とすると考えられる。規模は南北軸357cm、東西軸210cm以上、深さ最大で105cmを計る。断面形は逆台形で、底面は南側から北側へかけてゆるく傾斜している。堆積土は4層確認した。黒色系のシルト・砂質シルト層である。1b層では灰が互層でみられ、2層は基本的に灰の層である。東壁でSD 4・8を切っている。底面北側部で平面形が横円形の土坑を1基検出している。規模は長軸124cm、短軸79cm、深さ約100cmを計る。SD 8とは軸方向に違いがみられ、底面形が北側が円形で南側が方形、底面が北側に傾斜している点から、SD 8の二次使用が考えられた。堆積土は1層確認した。黒色の砂質シルト層で、下部につれて砂質がつよくなる。井戸跡(SK15)の性格をもつと考えられる。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、陶器鉢・壺・甕、青磁碗、土師質土器皿、砥石、木槌状木製品、釘があり、SK15からは曲物が出土している。

**SK 9 土坑** 3A区に位置する。平面形はややいびつな長円形と考えられる。北側部をSD 2に切られている。規模は南北軸128cm以上、東西軸75cm、深さ最大で17cmを計る。断面形は皿状と考えられるが、底面はゆるい凹凸面となっている。堆積土は1層確認した。暗褐色の粘土質シルト層である。遺物にはロクロ使用の土師器环がある。

**SK11 土坑** 2区に位置する。平面形は長円形と考えられる。ピット・SD12に切られている。規模は長軸方向が98cm以上、短軸が35cm以上、深さ最大で10cmを計る。断面形は皿状と考えられる。堆積土は1層確認した。暗褐色のシルト層である。土師器が出土している。

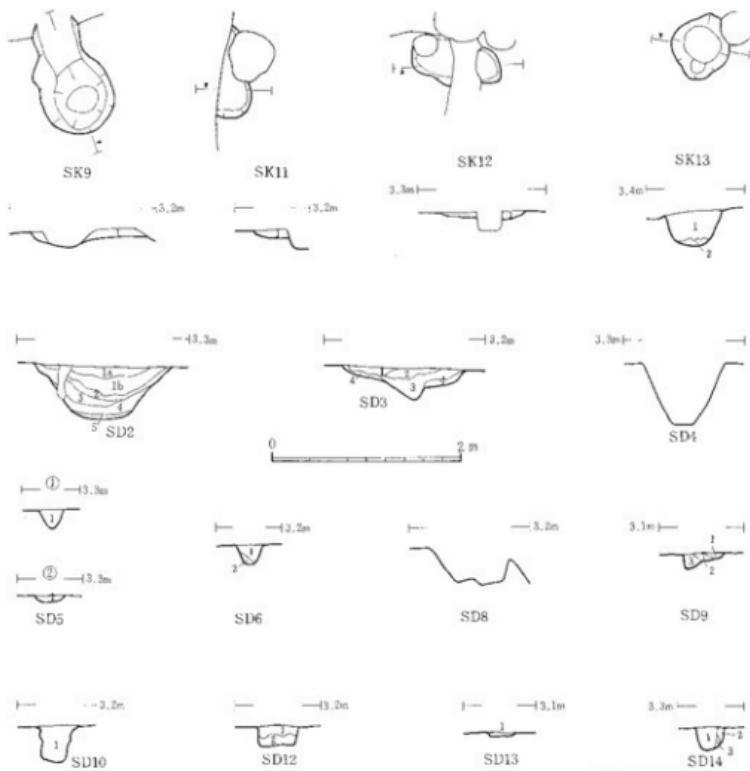
**SK12 土坑** 1区に位置する。平面形はやや不整な長円形である。ピット及びSD14・15に切られている。規模は長軸94cm、短軸45cm程、深さ最大で9cmを計る。断面形は皿状である。堆積土は1層確認した。黒褐色のシルト層である。土師器が出土している。

**SK13 土坑** 1区北側に位置する。平面形はほぼ円形である。ピットに切られている。規模は径63cm程、深さ38cmを計る。断面形は底面がやや丸い逆台形である。堆積土は2層確認した。シルト質の黒褐色土が主体をしめる。弥生土器・土師器が出土している。

**SK14 土坑** 4区西壁に位置する。SD 3のコーナー部と誤認し、共に掘り上げたため全容は不明である。残存状況から平面形は円形と考えられる。SD 3・9を切っている。深さ65cmを計る。断面形はやや開いた擂鉢形で底面付近で段をもつ。堆積土は4層確認した。黒褐色系のシルト層で焼土・炭化物・灰をまばらに含む。

## 2) 溝跡

**SD 2 溝跡** 3区に位置する。東西方向に直線的に延びる。底面での軸方向はN-81°-Eである。



透視名	層	生	置	年	透視名	層	生	置	年	名
SK 9	1 褐色	HYR9/3	粘土質シルト	IV層・軟化粘土・含油	SD 4	1 黒褐色	HYR9/2	シルト	粘土質粘土に含む	
SK11	1 褐色	HYR10/3	シルト	IV層・軟化粘土・含油	SD 4	2 褐褐色	HYR9/2	シルト	粘土質粘土に少々含む	
SK12	1 黒褐色	HYR12/2	シルト	サンゴ貝殻を多く含む	SD 5	1 褐色	HYR14/1	シルト	粘土質土・グリナイト含む	
SK13	1 黒褐色	HYR12/1	シルト	層中にサンゴ貝殻が混在	SD 6	1 赤褐色	HYR13/2	シルト	粘土質土・グリナイト含む	
	2 にかい青色	HYR13/1	シルト		SD 6	2 黒褐色	HYR12/2	シルト		
	1 高純色	HYR12/5	シルト	生物灰・灰を含む下部ではレンズ状	SD 6	2 黒褐色	HYR12/1	シルト	黄褐色土が混じる	
SK14	2 地塊色	HYR12/3	シルト	軸上・軟化粘土を含む下部ではレンズ状	SD 6	3 灰褐色	HYR13/1	シルト		
	3 褐色	HYR12/7	シルト	灰を含む	SD 8	1 灰褐色	HYR13/2	シルト	黄褐色土群に含む	
	4 褐色	HYR12/1	シルト	多量をブロックで含む	SD 8	3 灰褐色	HYR12/2	砂質シルト		
	1a 灰褐色	HYR13/6	シルト	IV層・軟化粘土を含む	SD 8	3 灰褐色	HYR12/1	シルト	砂質シルト	
	1b 褐色	HYR13/5	シルト	1a層よりIV層にかけての網目が多い	SD 8	1 灰褐色	HYR12/1	シルト	黄褐色土群に含む	
	2 褐色	HYR13/7	灰	II層・粘土質シルトを含む	SD 9	2 灰褐色	HYR13/6	粘土質シルト	1層・IV層をうまく区分せしむ	
SD 2	3 褐色	HYR13/6	粘土質シルト	IV層の網目？灰の層・入力が混じる	SD 9	3 灰褐色	HYR13/2	シルト	2層を混じた	
	4 褐色	HYR13/7	灰	IV層・軟化粘土を含む	SD 9	1 灰褐色	2HYR12/2	シルト	II層・マンダラ・灰・粘土層を少量含む	
	5 褐色	HYR13/3	粘土質シルト	IV層・粘土質シルトを含む	SD 12	1 褐褐色	2HYR12/1	シルト	IV層に含む	
SD 3	1 褐色	HYR14/7	シルト	IV層をブロックで含む	SD 12	2 褐褐色	2HYR12/2	シルト	IV層に含む	
	2 にかい青色	HYR14/3	シルト	IV層をブロックで含む	SD 12	3 灰褐色	2HYR12/1	シルト	IV層に含む	
	3 灰褐色	HYR15/2	シルト	IV層をブロックで含む	SD 14	1 灰褐色	HYR15/2	シルト	IV層に含む	
	4 褐褐色	HYR15/1	シルト	IV層・ブロックで含む						

図7 IV層面検出構造(2)

SK 9 及び SD17 を切っている。規模は上端幅143~154cm、下端幅44~51cm、深さ53~58cm、確認長445cmを計る。断面形は逆台形である。底面高に大きな差はない。北壁上部に小ピットがみられる。堆積土は5層確認した。上層は褐色系のシルト層で、下層につれ粘土質となり、最下層は粘土となる。2層は基本的に灰の層で、3・4層にも灰がみられる。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、陶器天日茶碗、土師質土器擂鉢、釣、古錢、木片がある。

SD 3溝跡 3・4区の中間に位置する。東西方向に直線的に延びる。底面での軸方向はE-10°-Sである。ピット及びSK14に切られている。規模は上端幅127~180cm、下端幅13~16cm、深さ28~39cm、確認長398cmを計る。断面形は溝中央部にU字状の凹をもつ浅い皿状である。底面高に大きな差はない。堆積土は4層確認した。褐色系のシルト・砂質シルトである。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、陶器甕？、板状の鉄製品がある。

SD 4溝跡 1・2区の中間に位置する。東西方向にほぼ直線的に延びる。調査区東壁付近でSD 5・6がほぼ直角に取り付く。底面での軸方向はE-16°-Sである。ピット及びSK 4・8に切られ、SD 8を切っている。規模は上端幅78~98cm、下端幅16~23cm、深さ65~69cm、確認長454cmを計る。断面形は立ち上がりがつよい逆台形である。底面はほぼ平坦で底面高に大きな差はない。堆積土は3層確認した。褐色系のシルト層である。遺物には土師器、須恵器、青磁碗？がある。

SD 5・6溝跡 SD 4の南北に取り付く溝跡である。SD 5が北側、SD 6が南側に位置する。遺構確認時に切り合いが認められず、同時期のものと判断した。やや蛇行はあるが南北方向にほぼ直線的に延びる。SD 5はピットに切られ、SD15を切っている。SD 6はピット・SD 2に切られ、SD17を切っている。規模は上端幅20~30cm、下端幅7~13cm、深さ7~22cmを計る。確認長はSD 5が505cm、SD 6が302cmを計る。断面形は皿状・U字形である。底面はほぼ平坦である。SD 5は北から南に傾斜をみると、SD 6には大きな差はない。堆積土は黒褐色のシルト層である。遺物には土師器、須恵器がある。

SD 8溝跡 2区に位置する。東西方向にほぼ直線的に延びる。底面での軸方向はE-9°-Sである。SK 4・8及びSD 4に切られ、SD12を切っている。規模は上端幅81~103cm、下端幅42~57cm、深さ45cm、確認長412cmを計る。断面形は逆台形である。底面は西側がほぼ平坦で東側はやや凹凸がみられる。西側から東側へゆるく傾斜がみられる。堆積土は3層確認した。黄褐色系の砂質シルトである。遺物には土師器・須恵器・磨面をもつ礫がある。

SD 9溝跡 4・5区に位置する。南北方向にやや蛇行し延びる。SK 1・SD10に切られ、SD13・土器埋設遺構を切っている。規模は上端幅45~79cm、下端幅37~54cm、深さ7~16cm、確認長815cmを計る。断面形は浅い皿状であるが中央部では西側部が一段低くなり壁が急角度で立ち上がる。底面高に大きな差はない。堆積土は中央部で3層確認した。黄褐色系のシルト層である。

遺物には弥生土器、土師器がある。

**SD10 溝跡** 5区に位置する。平面形は半円形である。南北端部とも壁が急な立ち上がりをみせる。円形プランを呈していたかは不明である。平面外周プランから計測すると、半径約2mの円弧となり円周の約半分となっている。規模は上端幅50~64cm、下端幅22~27cm、深さ21~36cmを計る。底面はほぼ平坦であるが、中央部分にかるい段が1ヶ所みられる。底面高は段を起点として端部に向かいやや高くなっている。断面形は方形で壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1層で黒褐色のシルト質粘土である。遺物には弥生土器、土師器がある。

**SD12 溝跡** 2区に位置する。南北方向に直線的に延びる。底面での軸方向はN-9°-Eである。SD 2・8に切られ、SK11・SD17を切っている。規模は上端幅39~60cm、下端幅28~32cm、深さ21~25cmを計る。断面形は方形で壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で底面高に大きな差はない。堆積土は2層確認した。暗褐色のシルト層が主体であるが下部にIV層が堆積している。位置関係からSD14と同一とも考えたが、規模に違いがみられ不明である。遺物には土師器、須恵器、磁石がある。

**SD13 溝跡** 5区に位置する。確認長95cmの溝跡である。ピット及びSD 9に切られている。規模は上端幅28cm、下端幅20cm、深さ5cm程を計る。軸方向はE-23°-Sである。堆積土は1層確認した。灰黄褐色のシルト層である。遺物には弥生土器、土師器がある。

**SD14 溝跡** 1区に位置する。やや蛇行するが南北方向に直線的に延びる。底面での軸方向はN-4°-Sである。ピットに切られ、SK 5・12・SD15を切っている。規模は上端幅22~32cm、下端幅13~18cm、深さ11~26cmを計る。断面形はU字形で壁はきつく立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北側から南側へゆるい傾斜をもつ。堆積土は3層確認した。主体は暗褐色のシルト層である。土師器が出土している。

**SD15 溝跡** 1区に位置する。東西方向にほぼ直線的に延びる。底面での軸方向はE-8°-Sである。ピット・SK 8・SD 5に切られている。規模は上端幅25~38cm、下端幅18~29cm、深さ5~7cmを計る。断面形は皿形である。底面はほぼ平坦で、底面高に大きな差はない。堆積土は1層確認した。黒褐色のシルト層である。土師器が出土している。

**SD16 溝跡** 6区に位置する。SD 1・11の下層に位置し、底面部分のみの残存である。断面形及び堆積土から河川跡とも考えられたが不明である。方向はE-18°-Sである。底面は東側から西側へ若干低くなっている。堆積土は4層確認した。各層とも混成層で砂質シルト・砂である。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、陶器壺、石器、礫がある。

**SD17 溝跡** 2区に位置する。東西方向に直線的に延びる。底面での軸方向はE-2°-Sである。ピット・SD 2・6・12に切られている。規模は上端幅54~67cm、下端幅28~32cm、深さ31~36cm、確認長407cmを計る。西側端部が確認されほぼ垂直に立ち上がっている。断面形は逆台形で

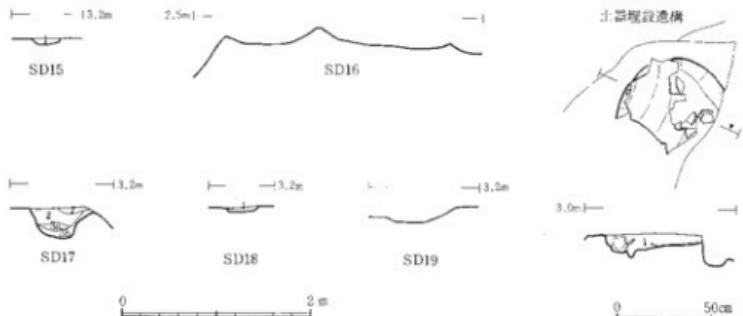
ある。底面は平坦で高低差もみられない。堆積土は3層確認された。褐色系の粘土シルトである。1層に灰白色火山灰がブロックで含まれている。遺物には土師器壊・高台付壊・壺、須恵器壊・壺、棒状の疊がある。

**SD18 溝跡** 2・3区の中間に位置する。確認長129cmの溝跡である。軸方向はE-47°-Sである。規模は上端幅34cm、下端幅28cm、深さ5cmを計る。断面形は皿形である。堆積土は1層確認した。灰黄褐色のシルト層である。遺物には弥生土器、土師器がある。

**SD19 溝跡** 2区に位置する。SK 8の縁辺部と誤認し共に掘り上げたため、溝北側部が残存しない。調査区西壁と溝東側部で壁の立ち上がりがみられる。平面プランは弧状と考えられる。ピットに切られ、SK 8を切っている。溝東側部での計測値は上端幅75cm、下端幅31cm、深さ16cmで、確認長は316cmを計る。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層確認した。褐色系のシルト層である。

### 3) 土器埋設遺構

5A区に位置する。削平及びSD 9に切られ全容は不明である。径60cm程の円形の掘り方内に弥生土器壺が横位状態で確認された。底面はやや東側に傾斜をみるとほぼ平坦である。壁は16cm程遺存しておりややきつく立ち上がる。土器は底面に密着している。埋土は1層確認した。黄橙色と黒褐色の混成層である。土器以外の出土遺物はない。



遺構名	部位	う	深	性	質	堆	名	う	質	堆	名	う	質	堆
SD15	1	黒褐色	10YR2/2	シルト	IV層・サンゴ貝殻中に含む		2	灰褐色	10YR4/2	シルト	灰白色・灰を帶中にプロト的に含む			
I	褐色系黃色	2.5Y4/2	砂質シルト	層上に礫石混在まだらに含む		2	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	塊上・灰・炭化物・土器を含む				
	灰褐色	2.5Y6/2	砂質シルト			3 a	黒褐色	10YR2/2	粘土質シルト	灰・炭化物を含む				
SD16	2	褐色系黃色	2.5Y6/2	砂質シルト	SD15坑に堆積	3 b	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	IV層・灰泣跡・灰土少含む				
	オリーブ褐色	2.5Y3/2	砂質シルト			SD18	1	灰褐色	10YR4/2	シルト	IV層・褐色・鉄化・礫石に含む・土器片含む			
	3	深褐色	2.5Y3/1	砂質シルト		SD19	1	深褐色	10YR3/2	シルト	IV層・褐色・鉄化・礫石に含む			
	褐色質褐色	2.5Y4/2	砂			2	褐色	10YR4/1	シルト	灰褐色少含む				
	4	褐色質褐色	2.5Y3/2	砂質シルト	レンズ狀に堆積	3	褐色	10YR4/6	砂質シルト	褐色質・褐色色土上に土器				
		オリーブ褐色	2.5Y4/2	砂		4	褐色	10YR3/2	シルト					

図8 IV層面検出遺構 (3)

## VI. 出土遺物について

### 1. 弥生土器（図9）

各遺構・基本層III層より多くの破片が出土している。壺・甕・鉢・蓋がある。当土器が帰属する遺構は埋設土器遺構1基のみである。図示資料は7点である。

壺=1は大型の壺で体部下半から肩部にかけての破片資料である。肩部に最大幅をもち推定56cm、残存高38cmを計る。体部外面にLRの縄文が地文として施される。2は肩部付近の破片資料である。沈線により同心円文が描かれ、植物茎回転文による充填縄文が施されている。3は底部資料であるが壺とした。体部外面には植物茎回転文が施され底部には木葉痕がのこる。底面には径3cm程の焼成後の穿孔が認められる。内面はミガキ調整である。

甕=4は体部が外傾気味に立ち上がり上部で内湾するもので、最大幅を体部上部にもつ。口縁部は短くかるく外反し丸くおさまる。口縁部下に連続刺突文が施され、地文としてLR縄文が施文される。5は小型のもので、口縁～体部資料である。口唇部には縄文の押圧がみられ、体部には綾縞文が施文される。

鉢=体部上部の破片資料である。地文に植物茎回転文が施され、沈線により変形工字文が施文されている。

蓋=ツマミ部の破片資料である。蓋部から直立気味に立ち上がり外反し丸くおさまる。口径は58mmを計る。器面調整は摩滅のため明らかでないがナデ状のミガキがみられる。

出土した土器類のうち時期が認定できるものは、埋設土器とした壺を含めすべて楔形団式期のものである。他の時期の資料がみうけられず蓋や他の破片資料も当式期の可能性がつよい。

### 2. 土師器（図10～13）

製作に際しクロ使用(B類)のものと不使用(A類)のものがある。各遺構内・基本層III層より多量に出土するが後世の流入・攪拌がほとんどである。A類が帰属する遺構にはSK5、B類ではSD17・SK9がある。

土師器A類 坯・高环・器台・甕・台付甕・壺・甕がある。多くは破片資料であるが、SK5からは多量の遺物が出土している。

坏=形態的特徴から3類に分類できる。図示資料は3点である。

1類：底部は中央に半円の凹面がみられ平底状となる。体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁部との境で屈曲し、ゆるいくの字状となる。口縁部は外方へ内湾気味に立ち上がる。器面調整は再酸化および摩滅のため不明な所もあるが、口縁部はハケメの後ヨコナデ、体部はヘラミガキである。内面は不明である。最大径は口唇部に位置する。口縁部と体部の高さの比率はほぼ1対2である。外面に赤彩が遺存するが内面は摩耗等のため不明である。

2類：口縁部が頸部から外方へ内弯気味に長く立ち上がり、口唇部は直立気味となる。頸部内面はつよく屈曲する。全体的にみてやや器厚がある。器面調整にハケメがみられるが最終的には内外面ともヘラミガキが全面に施される。内外面とも赤彩されている。

3類：底部は平底で、体部は外傾しながら立ち上がり口縁部との境でつよく内弯する。口縁部はほぼ直立気味で短く立ち上がる。器面調整は口縁部の内外面にヨコナデ、体部は外面が摩滅のため判然としないが横位方向にヘラケズリがみられ、内面は放射状のヘラミガキである。

高环=口縁部及び脚部資料があり4類に分けられる。図示資料は4点である。

1類：坏部は底部から外方へ内弯しながら立ち上がり、口縁部と体部との境に稜及び屈曲をもち、さらに外傾気味に内弯し口唇部へ丸くおさまる。器面調整は内外面ともヘラミガキで、内外面とも赤彩されている。

2類：脚部が外反しながら大きく開く。器面調整は内面にハケメがみられ、外面は不明である。脚部上端は接合面での剥離となり中央が凹面となっている。

3類：脚部がハの字状に直線的に開き、裾部が外側につよく開く。器面調整は外面にヘラミガキ、内面裾部に横位方向のヘラケズリがみられる。内面上部にはシボリメがみられる。

4類：脚部が柱状のもので下方に向かいやや開き気味である。脚上部は中実である。器面調整は内面に横位方向のあさいケズリがみられ、外面は不明である。上端部は坏部との接合面となり浅い皿状の凹面となる。

器台=口縁部の小破片である。直線的に立ち上がり、口唇部は平面で頂部はつまみ出されるように断面三角形状にかるく突出する。器面調整は口唇部内外面がナデ、他はすべてヘラミガキである。両面とも赤彩されている。

壺=大型と小型の二種がある。なお、台付壺の脚部以外の資料はすべて大型の壺とした。図示資料は8点である。

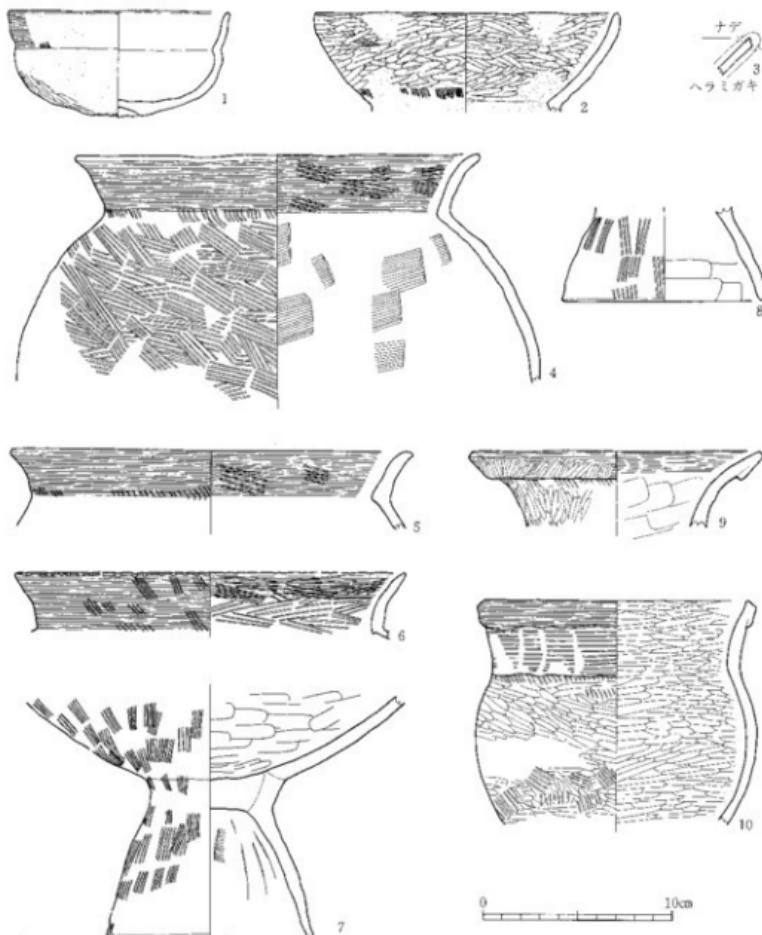
1類：大型のもので口縁部が外反気味に立ち上がる。口唇部が丸くおさまるもの(a)、口唇部がややうすで押圧による波状口縁となるもの(b)、口唇部が平らになるもの(c)がある。全体的に薄手の作りで、内面の頸部はつよく屈曲し立ち上がりをみる。器面調整は口縁部内外面ともハケメの後ヨコナデである。体部が知られる4は球形を呈するもので外面にハケメ、内面にヘラナデがみられる。

2類：大型のもので口縁部が外傾気味に立ち上がり、口唇部は丸くおさまる。口縁部が直線的に立ち上がり内面頸部はつよく屈曲し、外面頸部に粘土紐が巡り器厚が増しているもの(a)、口縁部中央が肥厚し口唇部はゆるく外反し内面頸部が丸くおさまるもの(b)、口縁部が全体的に肉厚で内面頸部が丸くおさまるもの(c)がある。器面調整は口縁部内外面ともヨコナデがみられ、9では内面に浅いヘラナデもみられる。残存する体部にはハケメがみられる。



岡旗	出土地点	所位	脚種	文	様	時 期	備 考	写・同
1	土器埋設遺構	底面	素	縄文 (LR)	輪形圖	土器棺	背部最大幅56.4mm 独存高38.3mm	
2	4B区	田層	亞	同心円文 光端縞文	輪形圖			3
3	3A区	田層	亞	植物茎回転文	輪形圖	底部径104mm 底部一木葉痕・焼成後の穿孔		2
4	SD16溝跡	2層	素	縄文 (LR) 連續斜突文	輪形圖	口縁径25.8mm 独存高175mm		1
5	SK 5土坑	2層	變	口唇部:縄文押正 体部:波線文	輪形圖			5
6	SK 7土坑	1層	鉢	変形工字文 滅消縞文・植物茎回転文	輪形圖			4
7	1A区	田層	亞			ツマミ部 径38mm		

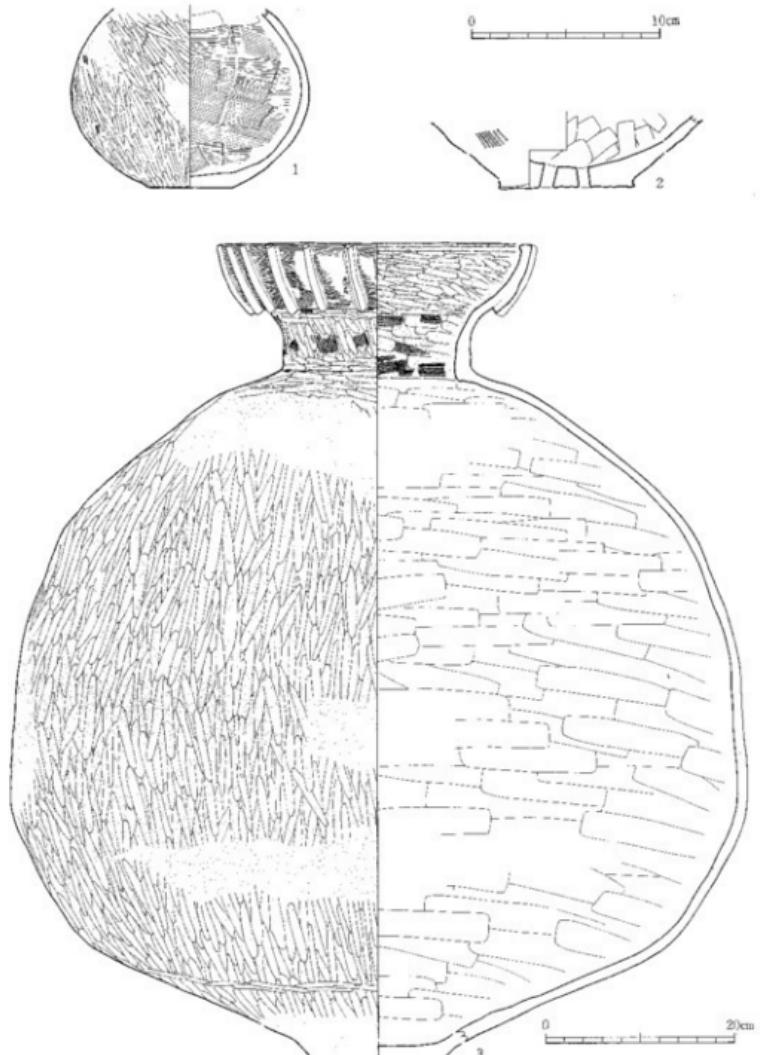
図9 出土遺物1 (弥生土器)



出所	番号	部位	外観	内観	内観	寸法	形状	分類	種	考	参考
1	新	底面	1(縦断面):ハケメ後ヨコナギ、2(横断面):ハラミガキ	牛骨	117	24	57	A1	多角形化	7	
2	灰	2層	口縁部:ハケメ後ハラミガキ	口縁部:ハラミガキ	162			A2	内側表面		
3	董	2層	口縁部:ハラミガキ	口縁部:ハラミガキ				A	底部の骨端三角形		
4	壁	2層	1(縦断面):ハケメ後ヨコナギ、体部:ハケメ	1(縦断面):ハケメ後ヨコナギ、外部:ハラミガキ	215			A1a		12	
5	裏	2層	口縁部:ハケメ後ヨコナギ	口縁部:ハケメ後ヨコナギ	214			A1a		11	
6	裏	2層	1(縦断面):ハケメ後ヨコナギ	1(縦断面):ハケメ後ヨコナギ	(208)			A1b	皮肉付	9	
7	台付	2層	体部-茎部:ハケメ、縫合:ハケメ	体部-茎部:ミガキ状のナゲ、縫合:ハラミガキ	119			A	再加工	10	
8	台付	2層	縫合:ハケメ	縫合:ナゲ	106			A	再加工		
9	蓋	2層	1(縦断面):ハケメ・ヨコナギ後ハラミガキ	1(縦断面):ヨコナギ・ミガキ状のナゲ	(156)			A2a	複合	8	
10	底	2層	口縁部:横筋のハケメ・ヨコナギ、体部:ハケメ後ハラミガキ	口縁部-体部:ハラミガキ	(148)			A2a	底と口縁 間の壁	13	

図10 出土遺物2 (S K 5 土坑出土土師器 1)

( )内は推定値 年代は



図版	種類	時代	所	文	説明	内	文	説	分類	目	考	等	記	
1	白	2周	外腹	ハケメ	内腹	ハクミガタ	底面	ナデ	ハクナデ	44	A3	片側赤軸	伏櫛形	
2	銀	2周	外腹	ハケメ	体面	ナデ				22	A	ハクミガタ		
3	白	2周	口縁上部	横位のハケメ	口縁下部	ヨコナナメ	口縁上部	ヘラミガタ	口縁下部	ハケメ	228	(1660)	A1	赤形 二重口縁 伏櫛跡文 ハケメ形ヘラミガタ 体面 ハクミガタナデ

図11 出土遺物3 (S K 5 土坑出土土師器 2)

( ) 内は推定値 単位はcm

3類：小型のもので頸部から体部の資料である。体部は丸みをもつ算盤玉形を呈すると考えられる。接合が不可である同一個体の口縁部資料があり短頸のものである。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、頸部付近がナデ、体部はハケメの後ヘラミガキで、内面はナデ及びヘラミガキ状のナデがみられる。

台付壺=脚部及び体部下半～脚部の資料で、図示資料は2点である。脚部は下方に内湾気味にハの字状に開き端部で丸くおさまる。器面調整は外面にハケメ、内面にナデ・ヘラナデがみられる。壺部の内面にはミガキ状のナデがみられる。

(壺部と脚部の製作・接合工程)=底部となる円盤を作る→円盤の周縁から粘土を積み上げ脚部を作る→脚部の粘土上部から壺部の粘土を積み上げる。土器断面及び破片資料からこの工程で台付壺が製作されていることが観察された。

壺=口縁部及び体部の形態から3類に分けた。図示資料は4点である。

1類：二重口縁の大型の壺で、赤彩の土器である。口縁部は頸部からほぼ垂直に立ち上がり上方で外反し、上部は内湾気味に立ち上がる。口唇上部は平面で、端部内側は断面形が丸い三角形状に肥厚する。口縁上部には断面三角形の棒状浮文が等間隔に貼り付けられている。8本確認でき配置から判断して全周するものと考えられる。体部は底部から外反気味に立ち上がり、徐々に丸みをもって頸部へと続くやや下膨れとなる球形である。器面調整は外面が口唇部でヨコナデ、口縁上部に横位方向のハケメ、下部は縱方向のハケメ、体部はかすかにハケメがみられるが全面にていねいなヘラミガキが施される。内面は口縁上部がヘラミガキ、下部はハケメの後あさいヘラミガキ、体部はヘラミガキ状のナデが全面に施される。赤彩は塗り分けがみられ、内面は口縁部のみに外面は浮文を有する口縁上部を除く全面に施されている。特に大型の土器で口縁部径32.8cm、最大幅78cm、推定器高86cmを計る。

2類：複合口縁の壺である。口縁部が外傾気味に立ち上がるものの(a)、内湾気味に立ち上がるものの(b)がある。10は体部から頸部への立ち上がりがよわく広口の壺と呼称できる器形をもつ。底部は不明であるが体部は球形を呈する。口唇部は斜行をみる平面で端部が三角形に突出する。体部の成形・調整後に頸部に粘土の貼り付けがみられ沈線状に接合面が線状に巡る。外面の器面調整は口縁上部の帶部がヨコナデで下部が横位方向のハケメ、体部はハケメの後ヘラミガキである。内面は全面ヘラミガキである。

3類：小型の壺で底部から体部中央部までの資料である。体部は丸みをもって立ち上がり球形を呈する。長頸の壺と考えられる。器面調整は内面がナデ・ヘラナデで、外面は全面ヘラミガキが施され赤彩されている。

甑=底部周辺資料で1点ある。平底のもので中央部に集中して径5mm程の孔が4ヶ貫通している。体部は外傾気味にやや広く立ち上がる。器面調整は外面がハケメ、内面はナデである。

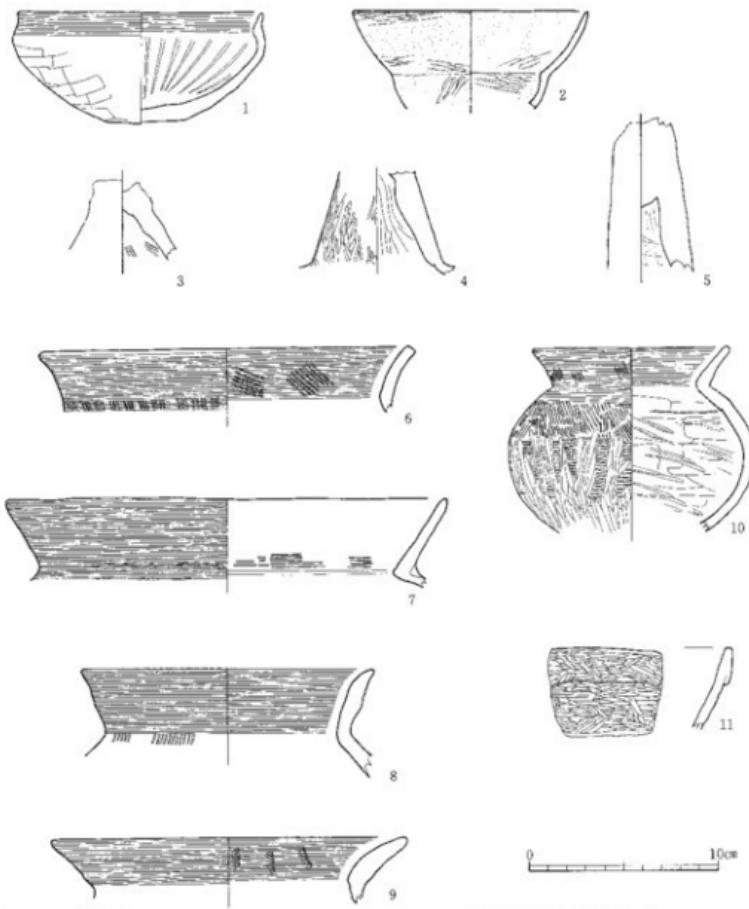


図12 出土遺物4(土器類)

( ) 内は推定 単位はcm

回数	出土地点	層位	基種	外 因 観 型	内 因 観 型	G標	採取	断面	分類	備 考	等・式
1	上5段	田畠	16	口縁部:ヨコナデ、体部:ヘラケズリ	口縁部:ヨコナデ、体部:ヘラミガキ	131	82	59	A3		A
2	1B区	田畠	16	口縁部~全体:ヘラミガキ	口縁部~全体:ヘラミガキ	(126)			A1	内表面走り	
3	S.D.6周辺	地土	16	不規	底部:ハテメ				A2	上面に複合の凹凸有り	
4	S.K.3土坑	2層	花坪	断面:ヘラミガキ	断面:シボリメ				A3		
5	S.K.4土坑	1層	花坪	不規	断面:ヘラケズリ				A4	上端に腰白の凹凸有り	
6	1B区	田畠	16	口縁部:ハテメ後ヨコナデ	口縁部:ハテメ後ヨコナデ	(202)			A5c		
7	1B区	田畠	16	口縁部:ヨコナデ	口縁部:ハテメ	(204)			A7a	表面に斜上走が直る	
8	調査区北側	田畠	16	口縁部~全体:ヨコナデ後ヨコナデ	口縁部:ヨコナデ	136			A7b	口縁部中央が肥厚	
9	調査区北側	田畠	16	壁:	口縁部:ヘラナデ後ヨコナデ	(180)			A7c		
10	1区	田畠	16	口縁部~全体:ヨコナデ	口縁部:ヨコナデ、底部:ナデ後ヘラミガキ	184			A3		
11	調査区北側	田畠	16	口縁部:ヘラミガキ	口縁部:ヘラミガキ				A7d	複合:壁	

以上、A類の土器は破片資料も含めて最も多くの器種が認められた。特にSK5からは数多くの土器が出土し、状況から強い共伴関係をもつ。器種には壺A1・A2類、器台、甕A1a・A1b類、台付甕、壺A1・A2a・A3類、鉢がある。これらの土師器は器形の特徴及び共伴関係から東北地方南部の土師器編年による「塩釜式」に位置づけられる一群である。他の土器類は基本層・遺構内流入遺物となるが、高壺A2類、甕A1c・A2a・A3類、壺A2b類は「塩釜式」に、壺A3類、高壺A3類・A4類、甕A2b・A2c類は器形的特徴から「南小泉式」に位置づけることが可能であろう。

**土師器B類** 壺・高台付壺・甕・鉢がある。細片資料で絶対資料数も少なく、器形の特徴を知り得るものは数少ない。図示資料は8点である。

壺=底部から内弯気味に外傾し立ち上がるもの、直線的に外傾し立ち上がるものがあり、口唇部で軽く外反するものもある。ロクロ日の凹凸は全体的に浅めである。底部の切り離しは回転糸切り(時計回り)で無調整である。内面には黒色処理・ヘラミガキが施されるが外面にも黒色処理・ヘラミガキが施されるものが1点みられる。

高台付壺=破片資料である。内面には黒色処理・ヘラミガキが施される。付高台である。底部の切り離しは不明である。

甕=破片資料のため口縁部の形態を主に2類に分別した。体部資料には外面にロクロ調整・縦位のヘラケズリがみられ、平行叩きの痕跡をもつものもある。内面にはロクロ調整がみられ、底部資料には回転糸切り痕がみられる。

1類：口縁部がくの字に外傾し、口唇部が上方に丸及び三角形状に立ち上がる。内外面ともにロクロ調整である。

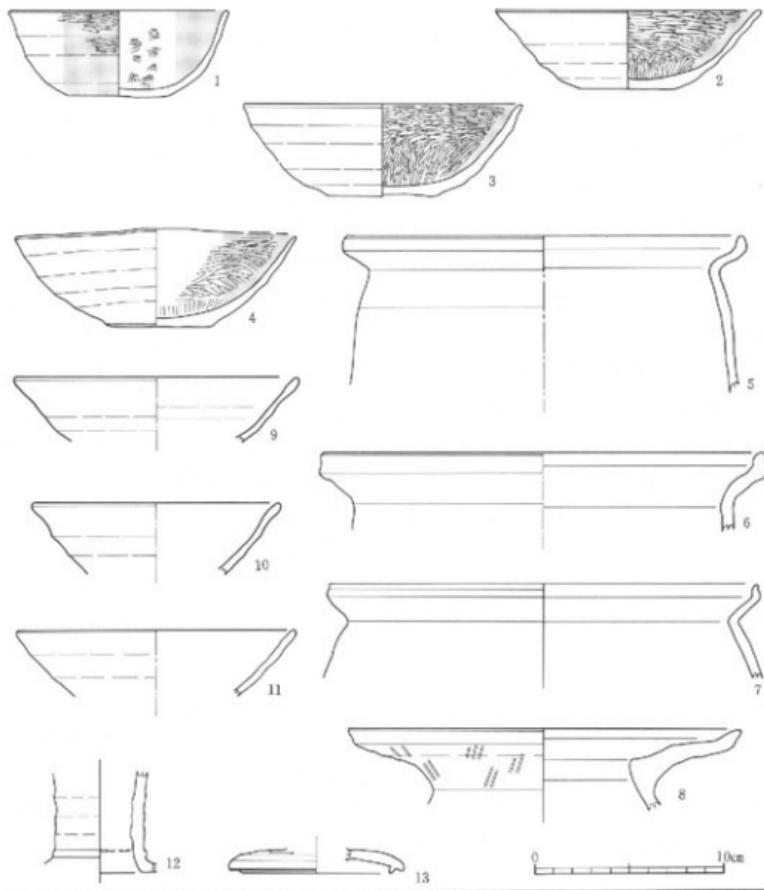
2類：口縁部が円弧状にきつく外弯気味に長く伸び、口唇部はやや外方に三角形状に立ち上がる。調整は外面がロクロ調整・平行叩き、内面はロクロ調整である。

鉢=体部から直線的に立ち上がり、口縁部はかるく外傾し短くおさまる。口唇部は平坦面となる。内外面ともロクロ調整である。

B類の土器は破片資料がほとんどで遺構出土のものも数少ない。SD17埋土1層には県内の遺跡でよく確認される灰白色火山灰が層的にみられた。当遺構の土器類は下層からの出土で火山灰降下以前の年代となるが、個々の特徴から年代を想定するには資料点数が少なく、大きく10世紀前半頃としておきたい。他のものは平安時代、表杉ノ入式期のものととどめたい。

### 3. 赤焼土器(図13)

壺のみの確認すべて破片資料である。外傾気味に立ち上がり、口唇部は体部に較べてやや肥大する特徴がみられる。底部資料には回転糸切り痕(時計回り)が観察される。遺構出土のものもなく表杉ノ入式期の年代にとどまる。



図号	出土地名	層位	形 態	特徴	外 形 著 査	内 形 著 査	口 径	底 径	身 高	分 類	備 考	写・図
1	SD17 猿島	2層	上部斜	円	ロクロ彫刻 ヘラミガキ	ヘラミガキ 黒色施塗	118	54	45	B	内側面黒色施塗	
2	SD17 猿島	2層	上部斜	円	ロクロ彫刻 高形 刻板捺引り	ヘラミガキ 黑色施塗	141	50	42	B		
3	SD17 猿島	2層	上部斜	平	ロクロ彫刻 高形 一致転丸引り	ヘラミガキ 黑色施塗	145	46	49	B		
4	SK 9上北	1層	土師器	平	ロクロ彫刻 高形 一致転丸引り	ヘラミガキ 黑色施塗	145	42	58	B		
5	2A区	田畠	土師器	縦	ロクロ彫刻	ロクロ彫刻	(23.0)			E1		
6	碧島北2層	田畠	土師器	縦	ロクロ彫刻	ロクロ彫刻	(23.0)			E1		
7	2B区	田畠	土師器	縦	ロクロ彫刻	ロクロ彫刻	227			E1		
8	1B区	田畠	土師器	縦	ロクロ彫刻 平行テテキ	ロクロ彫刻	208			E2		
9	2A区	田畠	赤陶土器	平	ロクロ彫刻	ロクロ彫刻	(35.0)					
10	2A区	田畠	赤陶土器	平	ロクロ彫刻	ロクロ彫刻	(33.0)					
11	2A区	田畠	赤陶土器	平	ロクロ彫刻	ロクロ彫刻	(44.0)					
12	2A区	田畠	赤陶土器	凸	ロクロ彫刻						頭部に凸部がある 会津地方大刀鋸?	
13	SD11 猿島	2層	机込器	凸	ロクロ彫刻後削りヘラケツリ	ロクロ彫刻	54			E1	カミナリ割り	

図13 出土遺物 5 (土師器・赤焼土器・須恵器)

( ) 内は推定値 単位はmm

#### 4. 須恵器 (図13)

壺・壺・甕・蓋が確認される。土師器B類と同様に出土量が非常に少なくすべて破片資料である。図示資料は3点にとどまる。

壺=すべて薄手のものでロクロ目の凹凸も浅い。色調は白色及びうすい灰色のものがほとんどで青灰色のものは数少ない。内面に黒斑をもつものもみられる。底部切り離しが認められるものは回転糸切りで、無調整である。

壺=頸部資料が4点ある。そのうちの3点には頸部の境に凸帯が巡る。色調は灰白色及びやや暗い灰色を呈する。図示資料は胎土・色調から会津若松市大戸窯の製品の可能性がある。

甕=すべて体部資料である。外面にはロクロ調整・平行叩きがみられ、内面にはロクロ調整及び平行・円形のオサエが観察される。壺と同様に大戸窯と考えられるものが含まれる。

蓋=小振りの蓋で内面にカエリをもつ。天井部はやや丸みをもち、ツマミ部は欠損している。天井中央部には回転ヘラケズリ調整が施される。

須恵器はすべて破片資料であり他の土器類との関係もなく年代については難があるが、壺は立ち上がり等赤焼土器壺の器形に類似し、壺・甕も含めて平安時代でも後半のものとしておきたい。蓋は郡山遺跡出土例がみられ単体遺物ではあるが7世紀末頃のものと考えられる。

#### 5. 陶器 (図14~15)

出土点数72点を数える。破片資料がほとんどで全体の器形を知り得るものは常滑の壺1点と志野の丸皿2点のみである。産地同定ができるものには常滑・瀬戸・志野・美濃・唐津・大堀相馬・在地がある。

常滑 壺2点、甕9点がある。図示資料は4点である。

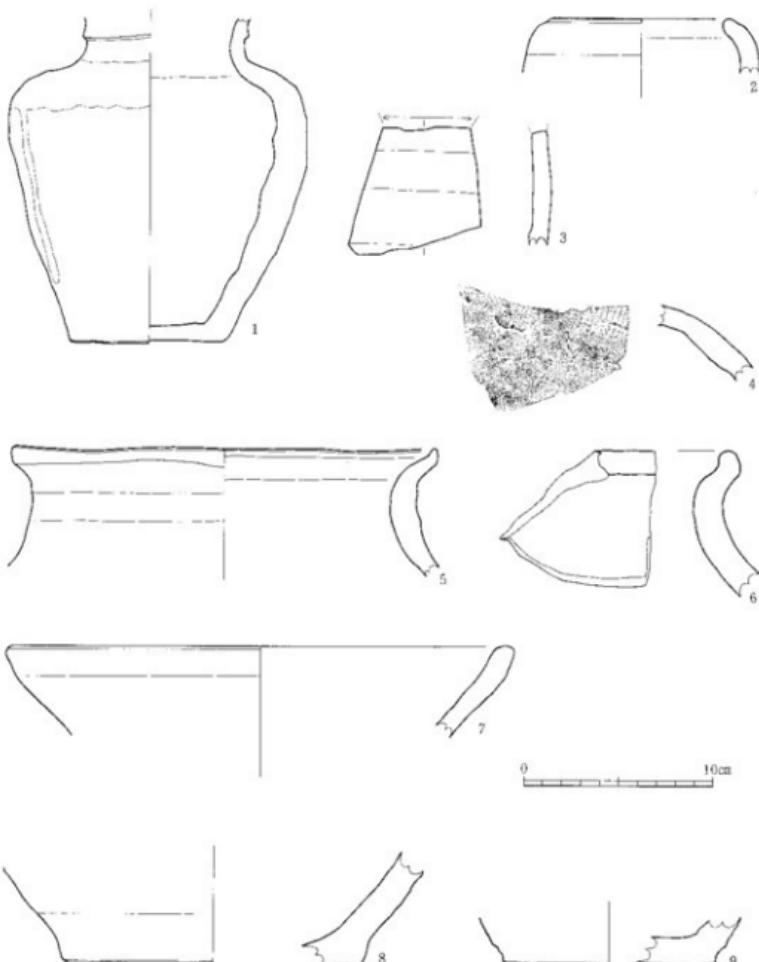
甕=2は体部から口縁部にかけてゆるく内湾しながら立ち上がり、口縁下部で浅い屈曲をもち丸くおさまる無頸の壺である。外面には自然釉がみられ部分的に鉄分の噴き出しがみられる。1は口縁上部と体部の一部が欠損するがほぼ全容は知られる。底部から外傾ないし内湾気味に立ち上がり肩部はやや張る。口縁部中位に段がみられ器厚を増し外反し立ち上がる。肩部を中心に自然釉がみられ全体的に光沢がある。

甕=すべて体部破片資料である。4は肩部付近のもので外面に格子目状の押印がみられる。3は破片断面の一辺に磨面がみられるもので二次的使用が確認される。

在地産陶器 甕20点、鉢7点、擂鉢1点がある。そのうち白石窯系の甕7点、鉢2点が含まれる。図示資料は5点である。

甕=口縁部資料2点、体部資料17点、底部資料1点である。5は口縁部が受け口状で口唇部が上方に三角に尖る。6も口縁部が受け口状で口唇部は丸くおさまる。胎土がやや砂質である。

鉢=口縁部資料2点、体部資料4点、底部資料1点である。7は外傾気味に立ち上がり口縁



図版	出土地点	層位	器種	地	備考	写・図
1	SK 8 土坑	底面	壺	素滑	自然輪、内面に赤色顔料付着、口縁部に段をもつ。残存高173	写真 2、15
2	IA区	田畠	小壺	素滑	口径96	
3	SD16 湿跡	底面	壺	素滑	板片断面に磨面あり 2次使用	
4	SK 8 土坑	2層	壺	素滑	押印有り	
5	SK 8 土坑	擦土	甕	古墳	口縁部受け口状、口唇部断面二角形。口径223	16
6	SK 2 土坑	3層	甕	在地?	口縁部受け口状、口唇部丸くおさまる	
7	SK 8 七坑	3層	鉢	白石塗灰	口径269	
8	SK 8 土坑	2層	鉢	在地	磨面有り。直径176	
9	1B区	田畠	甕	白石塗灰	底径112	

図14 出土遺物 6(陶器)

( ) 内は推定値 単位はcm

下部で浅い屈曲をもつもので口唇端部は平坦面となる(白石窯系)。8は底部周辺資料で残存する内面すべてに磨面がみられる。

櫛鉢=体部の小破片である。内面に櫛目がみられる。

古瀬戸 皿6点、碗3点、梅瓶、盤、小壺が各1点ある。図示資料は7点である。

皿=口縁部資料3点、体部資料1点、底部資料2点である。1は口縁部が内窓気味につよく立ち上がり丸くおさまる。口縁部内外面のみに施釉のみられる縁皿である。外面体部下部に横位方向のヘラケズリがみられる。2は灰釉の皿で、体部から丸く立ち上がり口縁部がつよく外窓しおさまる。3は口縁部内外面に厚く鉄釉が施され、内面鉄化粧となる。

碗=口縁部、体部、底部資料各1点が出土している。4は口縁部がくの字状につよく外傾しおさまる鉄釉の天目茶碗である。5は灰釉の碗で外面下部は露胎となる。高台はケズリ出しである。見込みにトチ跡が1ヶ所みられる。

盤=6は内面のみに灰釉が施される。弧状の痕跡が認められハケ塗りと考えられる。外面残存部はすべてヘラケズリである。

壺=7は推定口縁径8cm程の鉄釉の小壺である。口縁部は頸部からほぼ垂直に立ち上がり端部は外側に丸くおさまる。頸部下部に耳の残存部が認められる。

美濃 櫛鉢・鉢?の小破片が各1点ある。櫛鉢は底部資料で櫛目がみられる。両者とも内外面に鉄釉が施される。

志野 丸皿が2点ある。8は内外面すべてに灰白色の釉が施される。内面の立ち上がりがややきつく、くの字状となる。高台はケズリ出しではあるが均一でなく台状となる部分もある。高台部にトチ跡が3ヶ所みられる。口唇部に煤様の付着物がみられ燈明皿としての使用が考えられる。完形品である。9は8とほぼ同様であるが一回り大きく、立ち上がりがやや緩く、全体的にやや薄手である。

唐津 大鉢の破片が2点ある。10は口縁部資料で二彩のものである。他は体部資料で内側に稜がみられる。長石釉が内外面に施される。

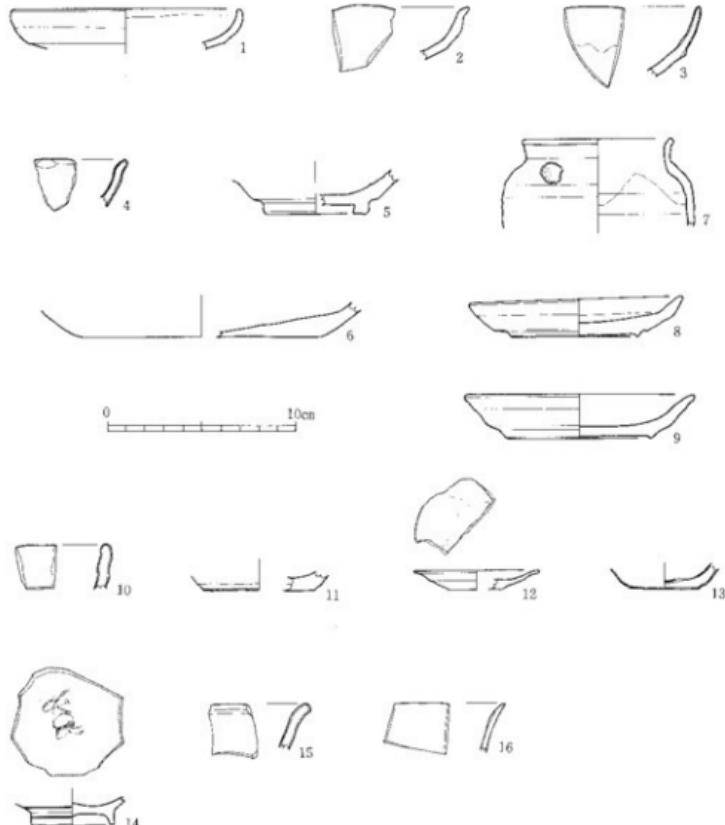
岸窯系陶器 岸窯系と考えられる鉢が2点ある。11は底部を除く内外面に青灰色の灰釉が施される。不明瞭ではあるが糸切り状の痕跡がみられる。他は体部資料で内外面に鉄釉が施される。両者とも胎土はやや砂質で色調は暗い赤褐色である。

大堀相馬 土瓶と碗の破片が7点ある。12はツマミ部が欠損するが土瓶の蓋である。

堤 燈明皿が1点ある。芯受けの一部が残存し、回転糸切りの痕跡が底部にみられる。

## 6. 磁器 (図15)

碗・皿・鉢の破片が11点ある。中国、肥前、瀬戸が確認される。中国産の碗は2点あり、染付がみられ端反となるものがある。



圖版	出土地点	層位	形狀・断面	产地	備 考	写・説
1	調査区北側	II層	陶器 直	古窯戸	縁鉢丸、口径124	
2	SK 3 井戸跡	5層	陶器 直	古窯戸	灰釉	
3	調査区北側	Ⅲ層	陶器 直	古窯戸	内面鉄化粧	
4	SD11 湾跡	2層	陶器 天目茶碗	古窯戸		
5	2A区	Ⅲ層	陶器 丸	古窯戸	灰釉、高ロケズリ出し、高台径32	
6	調査区北側	Ⅲ層	陶器 磁	古窯戸	灰釉、ハケ盛り？、外面…ハラケズリ	
7	SD11 湾跡	2層	陶器 小壺	古窯戸？	鉢難、耳付き（刻離）、口径79	
8	SK 3 井戸跡	5層	陶器 丸皿	志野	スス付青、海明皿に使用？、口径115、高さ22、高台径68、完形品	17
9	SK 3 井戸跡	5層	陶器 丸皿	志野	11径(122)、高さ23、高台径26	
10	2・3区	II層	陶器 大鉢	志野	二彩	
11	SK 3 井戸跡	2層	陶器 線？	志野系？	灰釉、底径38	
12	SK 2 井戸跡	検出	陶器 上角直	志野相馬	三水文、ツマミ欠損、直径66、高さ10	
13	4・5区	II層	陶器 備前皿	?	鉢難、名受け有り、底径36	
14	SK 3 井戸跡	5層	陶器 丸	志野	祭付、高台径45	
15	SK 2 井戸跡	1層	陶器 磁	無文鏡、玉縁		
16	SD 1 湾跡	廻土	白磁 陶	中國		

図15 出土遺物 7 (陶器・磁器)

( ) 内は推定値 幅位はmm

## 7. 青磁 (図15)

龍泉窯系の碗の小破片が6点ある。内面に雲文、割花文、蓮弁文がみられ、口縁部が玉縁となるものもある。

## 8. 白磁 (図15)

碗・壺・皿の破片が3点ある。碗と壺は中国産である。

## 9. 土師質土器 (図16)

皿・鉢・擂鉢がある。酸化焰焼成であるが赤焼土器と較べ焼成・胎土に違いがある。全体的に硬質であるが小破片では区別が難しい。資料点数は25点あり、図示資料は12点である。

皿=7点ある。「かわらけ」と称されるものである。すべて小振りのものでロクロ成形である。体部から外領気味に短く立ち上がり、底部には糸の燃が細い回転糸切り痕が見られる。器厚が厚手と薄手のものがある。1は底部周縁にナデ調整がみられ、やや軟質である。4は他に較べロクロ目が顕著である。

鉢=7点ある。5は上部に屈曲がみられ口縁下部の破片である。外面にはスタンプによる四重の亀甲文がみられ、内面にはナデ調整が施される。6は内面の立ち上がりから浅鉢と考えられる。内外面に煤様の付着物がみられる。回転糸切りの無調整である。7は砂粒を多く含みやや軟質である。底部にはナデ・ヘラケズリ調整が施され、外面には横位のヘラミガキが丁寧に施される。内面はナデ調整で横脂状の付着物がみられる。

擂鉢=11点ある。内面に櫛目をもつものである。全体に硬質であるが極めて硬いものも含まれる。9は底部が欠損するが口縁部径354mmを計る片口のものである。口縁部はかるく外反し丸くおさまる。口縁下部に沈線が1条巡る。櫛目は5本を1単位とし、横位に1条、縦位に5条確認される。調整は内外面ともナデが施され、器面に凹凸はみられない。8は口縁部が強く屈曲し内面に稜がつく。

## 10. 瓦質土器 (図16)

香炉3点・火鉢1点がある。

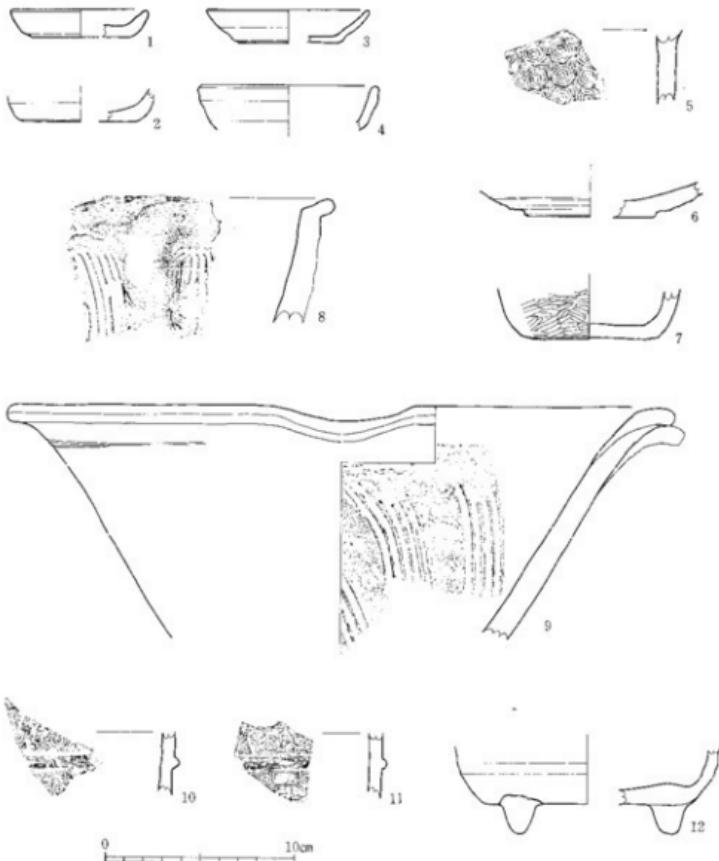
香炉=10と11は体部に断面半円形の凸帯が1条巡り、渦巻き文と雷文がスタンプされる。硬質である。

火鉢=底部の破片である。脚部の剝離面がみられ位置から三足と思われる。内外面ともロクロ・ナデ調整である。

## 11. 瓦

平瓦2点・丸瓦1点がある。

平瓦=凸面に縱走する綱叩き目、凹面には粗い布目痕が観察される。凹・凸面の側面に面取りが施される。瓦質は緻密で硬質である。瓦最大厚は25mmを計る。



図版	出土場所	層位	陶器・漆器	病	口径	底深	脚高	備考	等・回
1	1 AK	山腹	十郎賀十郎 皿	ロクロ調査、底部一帯軋み切り	73	24	15	かわらけ、底盤下端一帯軋みのナデ	19
2	SK 8 土坑	棺土	土師質土器 皿		(60)				
3	SD11 薙跡	2層	土師質土器 皿	ロクロ調査、底部一帯軋み切り	87	33	18	かわらけ	18
4	SD11 薙跡	2層	土師質土器 皿	ロクロ調査	(90)			かわらけ	
5	熊野部	土師質土器 釜		スタンプによる熟甲火、軟質					
6	2AK	山腹	十郎賀十郎 釜?	盛器、底軋み切り、底径 20、硬質、ススキ付着					
7	SD11 薙跡	2層	土師質土器 釜	外縁ハラミドギキ、底部一帯軋み切り? の後ナデ 瓦屋焼締→ヘラケリ、底径72。側面状の付着物有り					
8	SD11 薙跡	2層	土師質土器 釜	口縁軋み切り外縁 硬質					
9	SD11 薙跡	2層	土師質土器 釜	口径35.5、片口、2重の凹縁で一重位、外縁軋み下部に一条の伏線、やや軟質					20
10	調査区北側	瓦質土器 釜?		瓦と合致するのスタンプ、断面半円形の凸縁がある。底質、11に動べてやや包縫					
11	SK 2 井戸跡	5層	瓦質土器 釜?	瓦を合致するのスタンプ、断面半円形の凸縁がある。底質					
12	SD 1 薙跡	椗出	瓦質土器 釜?	ロクロ調査、足元の根、軟質					

( ) 内は推定値 単位はmm

図16 出土遺物 8 (土師質土器・瓦質土器)

丸瓦=凸面にナデ調整、凹面にはやや粗い布目痕が観察される。瓦質は緻密であるがやや砂質がつよい。瓦最大厚は18mmを計る。

これらの瓦は基本層III層・SD11からの出土で、搅拌及び後世の流入と判断される。多賀城I期瓦の特徴は認められず、大きく平安期に属すものとしておきたい。

## 12. 土製品（図17）

種類として土錘・土玉・土鉢・棒状土製品がある。

土錘=計6点ある。形状から大・中・小の3種に分別可能である。1は大型のもので両端部がやや丸くおさまり、形状は卵形である。長さ69mm、最大幅43mmを計り、径8mmの孔が中央部を貫通している。部分的にヘラミガキが残存しており、本来全面にヘラミガキ調整が施されていたと考えられる。SK5出土である。2は中型の欠損品で幅27mm程の円筒形と考えられる。孔の径は11mm程と推定される。縦位方向に丁寧なヘラミガキが施されている。硬質の土師質土器の胎土に類似し大・小のものとは区別される。SK2出土である。3~6は小型のものすべて欠損品であるが細長い管状のものと考えられる。端部が確認されるものが2点あり平坦面となっている。軸は16mm程を中心とし、孔の径は5mm程である。

土玉=1点ある。欠損品である。推定径23mm程のやや歪んだ球形と考えられる。径4mmの貫通孔がみられる。

土鉢=1点ある。下部が欠損している。ロクロ成形である。頂部は円盤でふさがれ、吊り下げ部は指によりつまみ出され貫通孔が1ヶ穿たれている。径39mm程の球体と考えられる。黒色を呈し硬質である。SD11出土である。

棒状土製品=1点ある。両端部が欠損している。現存長は31mmで、径13mmを計る円柱形である。一部に光沢面がみられ、ヘラミガキ調整が施されていたと考えられる。SD11出土である。

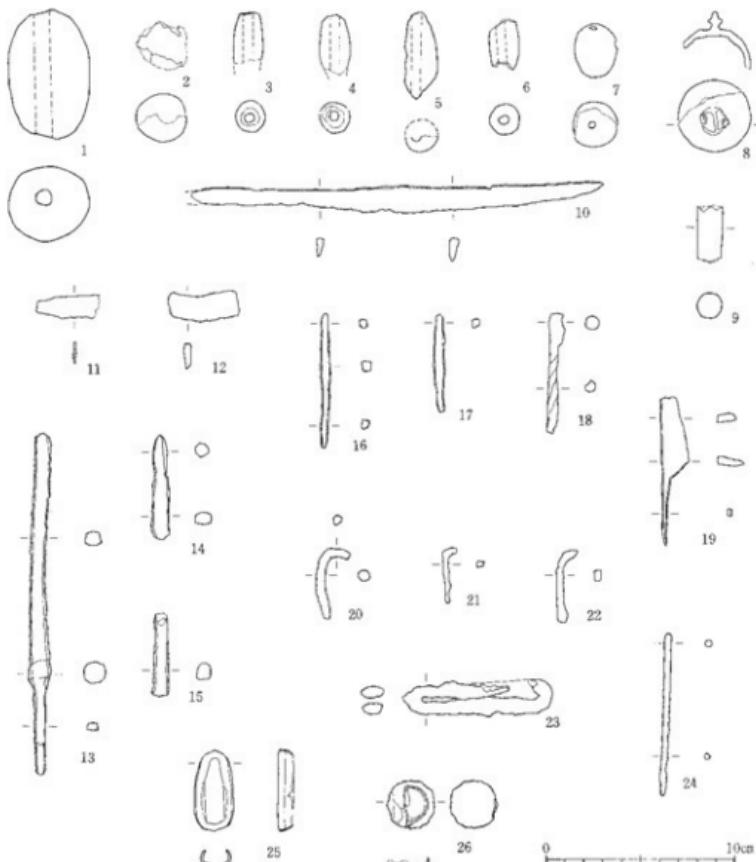
## 13. 金属製品（図17~18）

鉄製と銅製のものがある。鉄製品には小刀・鎌・釘・錐などがあり、銅製品には鍍金具?・古錢などがある。

小刀=3点ある。10は刀身先端・茎端が欠損し、銹化のため区部等が不明瞭である。残存長は21.9cmを計る。平棟平造りのものである。SD11出土である。11と12は刀身部の破片資料である。遺存がわるいが平棟平造りのものである。

鎌=3点ある。13は茎をもつもので長さ5cm程を計り断面は4~5mmの四角形である。基部は偏平な丸形であるが、先端部はほぼ同じ幅で延び先に向かうにつれ厚みが薄くなり偏平な四角形となる。14と15も鎌の先端部と考えられる。

釘=2点ある。16は先端部が残るもので、残存長は72mmを計る。断面形は正方形で下方に向かい小さくなる。SD11出土である。



図版	出土場所	地質	種類	備考	図版	出土場所	地質	種類	備考	図版	出土場所	地質	種類	備考
1	SK 5 未成	2層	土器	高さ3.0cm、幅4.2cm、厚さ1.2cm、ヘラガギ	23	14	黒鉄区北側	自燃	赤	先史期				
2	SK 2 未成	5層	土器	幅7.7、孔径1.1、ヘラガギ、直管	25	SD 2 未成	埋土	赤	先史期				37	
3	IAK	黑層	土器	幅6.5、孔径2.2	23	16	SD 1 黑層	1層	紅	残存部2.2、断面四角形			36	
4	4T区	黑層	土器	幅17、孔径3	22	17	SD 2 黑層	埋土	紅	残存部2.2、断面四角形			35	
5	2AK	黑層	土器	幅17、孔径5.5	18	SK 8 土坑	1b層	藍	残存部2.2、断面直角形				34	
6	3AK	黑層	土器	幅16、孔径5	19	SD 1 黑層	2層	赤	平底平造り、残存部2.2、断面直角形				33	
7	4AK西側	土坑	高さ2.9、幅2.3、孔径4		26	3・6 K	田植	毛根?	断面円形					
8	SD 1 黑層	4層	土器	ヨコヨコ形状、逐段縮窄の基底、上面に孔径1ヶ	24	21	SD 1 黑層	2層	毛皮?	断面直角形				32
9	SD 1 黑層	1層	棒状土器	幅1.3、円柱形、ヘラガギ	27	黒鉄区北側	自燃	赤	断面直角形					31
10	SD 1 黑層	2層	小刀	半筒半造り、残存部2.2	31	23	SD 1 黑層	2層	端状鉄製品					30
11	SD 1 黑層	1層	小刀	半筒半造り	24	5K 1 黑層	1層	針状鉄製品	残存部約0.5、断面四角形				29	
12	SD 1 黑層	3層	小刀	半筒半造り	25	5B区	田植	鍍金?	刀頭残?	銅製品				28
13	2B区	鐵	残存部1.8、厚幅0.5、断面四角形		32	16	1B区	田植	小形鉄製品					

図17 出土遺物 9(土製品・鉄製品・銅製品)

( ) 内は指定版 単位mm

錐＝両端部が欠損するが残存長は64mmを計る。基部は径5mm程の正方形で、下部はやや厚みを増し螺旋状のよじれがみられる。螺旋部の長さは42mm程で赤色の顔料が付着している。SK 8出土である。

和鉄？＝小刀様の形態をもつもので、平棟平造りである。刀身が三角形状を呈し、刃付近で斜めに切れている。茎部は幅4mm、厚さ2mmの細い板状である。SD11出土である。

毛抜？＝3点ある。細長い板を折り曲げている。残存部はU字状を呈すると考えられる。断面は20が円形で21と22は四角形である。21はSD11出土である。

環状鉄製品＝潰れがみられ板状となっているが、本来は長円形のものと考えられる。断面は鉄化のため不明であるが四角形を呈すると考えられる。SD11出土である。

針状鉄製品＝先端部は欠損するが上部は丸くおさまる。残存長86mmを計る。断面は円形で先端に向かい細くなる。SK 2出土である。

縁金具？＝倒卵形を呈するもので、高さ43mm・奥行き9mm・地金の厚さ0.6mmを計る。奥面には5mm幅程の縁がみられ内側は三角形の透かしとなる。側面は奥に向かい小さくなりしりすばまりとなる。上下端部には線状の突起、側面にはかるい稜がみられる。銅製品である。

不明銅製品＝破片資料で潰れもみられ上下関係も明らかでない。やや凸面となった円形の板に径20mm程の円形の筒が取り付くものである。飾金具、燭台の脚であろうか。

古銭＝北宋銭6枚、明銭2枚、紹平通宝と読めるもの・破片・判読不能のもの各1枚がある。

#### 14. 石製品（図18～20）

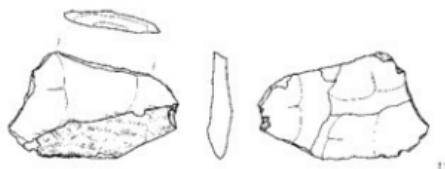
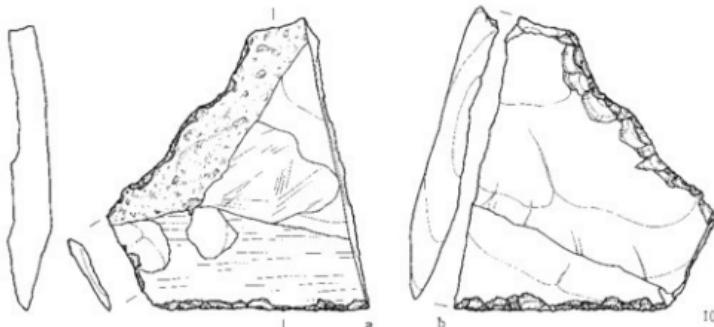
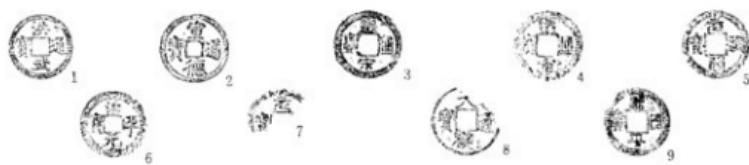
種類として石器、砥石、臼、礫がある。

石器＝2点ある。10は大型板状安山岩製石器である。平面形は不整な五角形を呈し、左右及び上部は折れ面となっている。片面は自然面で磨面がみられ、裏面は剝離面となる。二側縁には二次加工痕がみられ、下側縁には微細剝離痕が認められる。刃部は直線刃で片面に光沢面が確認される。SD16出土である。富沢遺跡に類例があり弥生時代のものと判断される。11は安山岩製の剝片である。片面には自然面がみられ、部分的に二次加工痕が認められる。

砥石＝6点ある。両端部が確認されるもの2点、欠損のもの4点である。形態的には分銅型と短冊型の二者が認められるが、本来は短冊型の直方体を呈していたと考えられる。側面はすべて磁面となっており擦痕及び大小の研磨溝がみられる。材質は5が石英安山岩で他は石英安山岩質凝灰岩である。5・6はSK 8出土、2はSD11出土である。

臼＝粉挽き臼と茶臼がある。粉挽き臼の上臼2点・下臼2点、茶臼の上臼2点・下臼12点の計16点が出土している。すべて欠損品である。熱を受け赤化しているもの、ススが付着しているものがある。

礫＝数多くの礫が出土しているが、ここでは磨面などの使用痕跡が確認されるものに限定し



0 10cm

列番	品 名	出土地点・層位	朝 間	年 代	同 墓	品 名	出土地点・層位	朝 間	年 代	考・註
1	鳥紋通宝(真)	SD12 陶器 2層 破	後 汉	光武元年(138BC)	29-①	8	大船通宝(真)	4A区	陶器	北汉 入製光年(1076)
2	市指造空(真)	SD11 陶器 2層 破	後 汉	靈帝末年(184年)	29-②	9	——	成豐式北漢	■新字造空と認める	29-②
3	鹿纹通宝(真)	ビット36 磁土 北宋 宋元2年(1064年)	29-③	同前	4	柳 穗	出土陶瓦・層位	宋	宋	4・5
4	大宋通宝(真)	ビット36 磁土 北宋 宋元2年(1064年)	29-④	大型圓状空山	5	大型圓状空山	SD16 陶器 2層	不規則五角形、下部鋸齒形斜面、刃部直角刀、刃面有齒(5)に斜面的有り。重さ=144g、石質一石英安山岩	38	
5	光明通宝(真)	ビット36 磁土 北宋 元祐元年(1086年)	29-⑤	6	柳 穗	4A区古墳	4A区古墳	宋	石質一石英安山岩	39
6	太平元宝(真)	1号区 1層 北宋 太平元年(1064年)	29-⑥	7	劉川石斧	——	——	宋	——	——
7	元祐通宝(真)	4A区 1層 北宋 元祐元年(1086年)	29-⑦	8	劉川石斧	4A区古墳	4A区古墳	宋	——	——

図18 出土物10(古錢・石器)

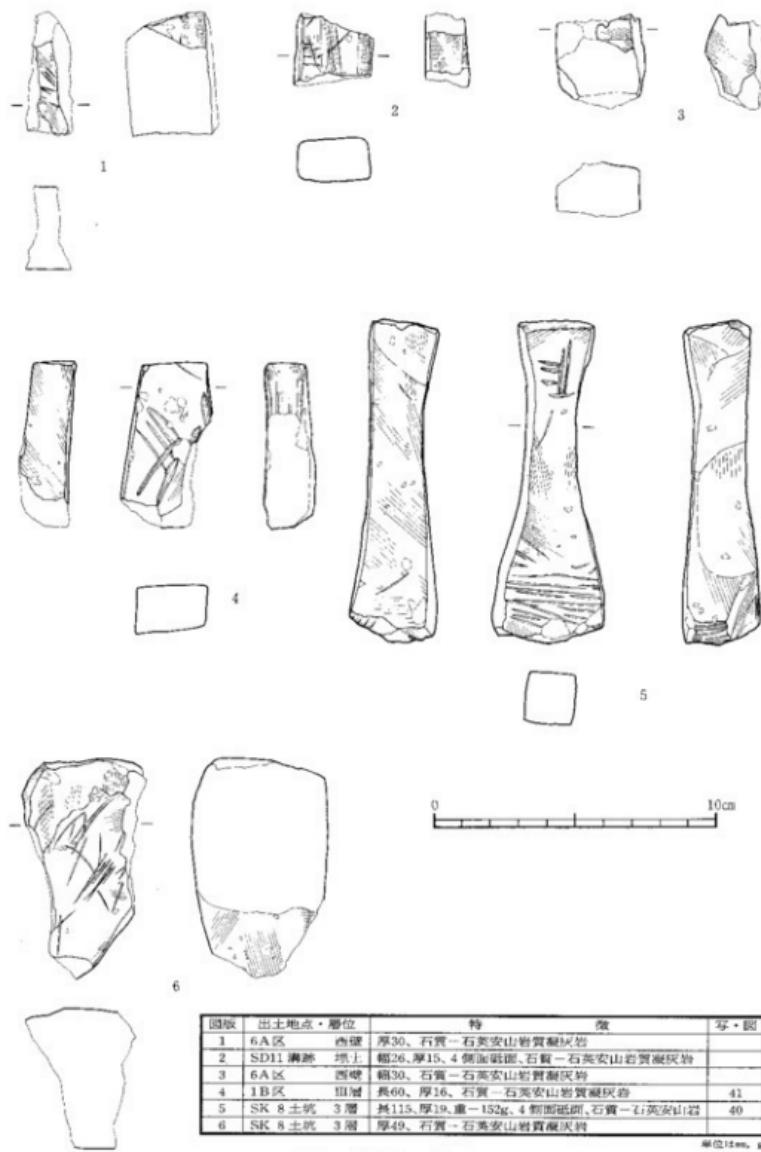
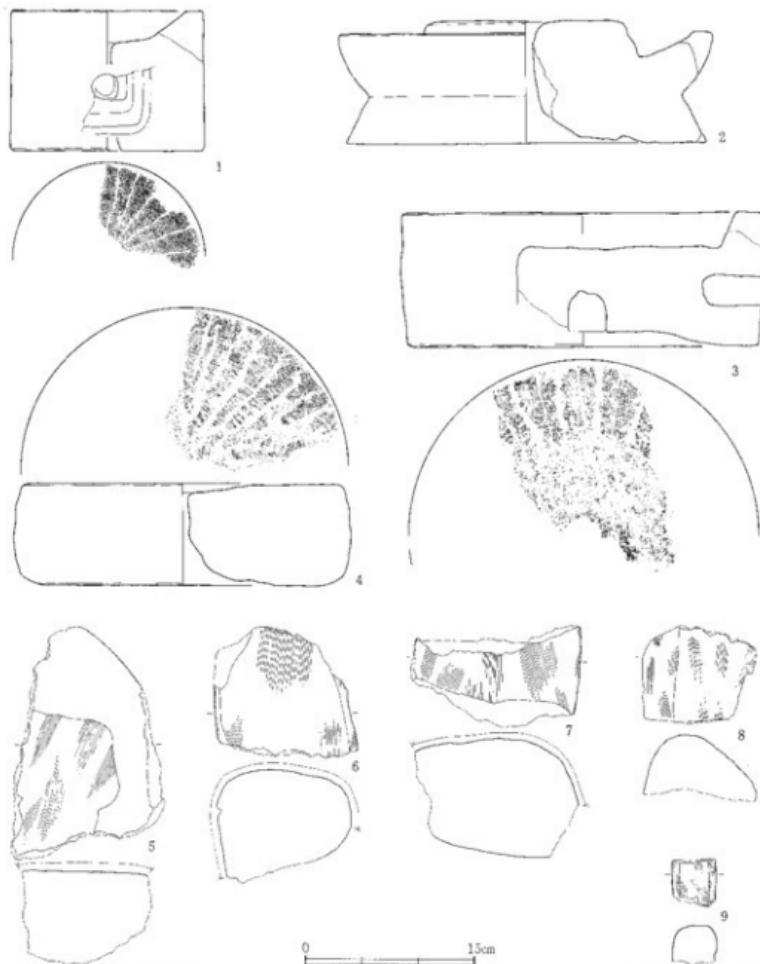


图19 出土遗物11(砾石)

图版	出土地点·层位	特徵	写·圖
1	6A区 西壁	厚30、石質—石英安山岩質凝灰岩	
2	SD11 溝跡 壁上	高26、厚15、4側面觀面、石質—石英安山岩質凝灰岩	
3	6A区 西壁	高30、石質—石英安山岩質凝灰岩	
4	1B区 田層	長60、厚16、石質—石英安山岩質凝灰岩	41
5	SK 8 土坑 3層	長115、厚19、重—152g、4側面觀面、石質—石英安山岩	40
6	SK 8 土坑 3層	厚49、石質—石英安山岩質凝灰岩	

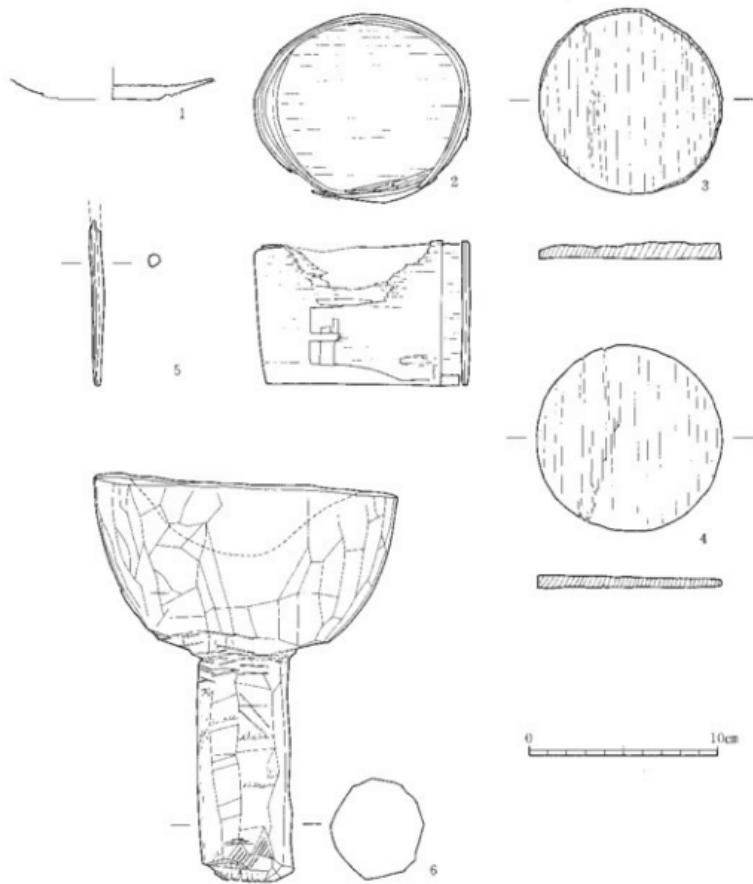
单位:mm, g



特　徴								年・代		
回数	出土地点	層位	種類	備考	年・代	回数	山手地名	層位	種類	年・代
1	SK24地	壁上	茶臼 上臼	底径(170)、高さ105+mm。底き丁孔部に凸面の穿孔有り。熱を受け赤変。スヌ付茎、石質一安山岩、1/1推存	45					
2	4 A底	陶器	茶臼 下臼	底径334~mm。上部厚160、高さ108。凹面摩滅。えぐりが大きい。スヌ付茎、石質一安山岩、1/5推存	42					
3	ビック16	壁上	粉挽臼 白臼	直径(322)、高さ100~mm。ふくあが大きい。スヌ付茎、石質一安山岩、1/4推存	44					
4	3A1K	山手	粉挽臼 内臼 下臼	底径(290)、高さ95。えぐりが大きい。丸穴付茎、石質一安山岩、1/2推存	43					
5	不明	壁上	縹	縹	45	6	SD1 滝筋	6号	縹	全頭縹、石質一石質安山岩質變火器
6	不明	壁上	縹	全頭縹、村に向創田、路を受けて赤変。石質一安山岩	9	SD17 滝筋	7号	縹	全頭縹、石質一石質安山岩質變火器	
7	不明	山手	縹	全頭縹、スヌ付茎、石質一安山岩						

図20 出土遺物12(臼・礎)

( ) 内は推定値 単位はmm



編號	出 土 地 点	層位	種 類	物 像	寸 法
1	SK 7 洪戸跡	2層	板	上下部欠損、白木	
2	SD11 洪戸	1層	漆物	柄円の可逆性有り、側板 - 厚さ 2mm/柱板、高さ 7.2cm、底盤 - 径約 9~10cm 厚さ 6mm の柱板	26
3	SD11 洪戸	4層	漆物の側板	側的、最大厚 9mm、柱板	27
4	SD11 洪戸	4層	漆物の底板	径 9mm、最大高 7mm、柱板	27
5	SK 4 才戸跡	5層	策	筒形直筋、最大幅 7、両取り有り 斜面面丸形	28
6	SK 8 土坑	2層	木綿状木製品	地ハタケ織成物、全長 21cm、斜面の上面面底に浮み掛掛、縫状孔直径 12mm、被木取り	25

図21 出土遺物13(木製品)

た。全資料が欠損し全容が判明しないが、使用及び廃棄に起因するものであろうか。光沢をもつもの、スス状の付着物をもつもの、熱を受け赤化しているものがある。

### 15. 木製品（図21）

破片となって数多くの資料が出土しているが、製品として確認できるものは椀・曲物・箸・木槌状木製品にとどまる。

椀=2点あり、白木のものである。ともに体部及び台部が欠損し全体の器形は不明である。SK 3出土である。なお、赤漆の椀と考えられる資料があるが樹脂のみの遺存であった。

曲物=厚さ2mm程の柾目板を右回りで重ね巻きにして側板としている。重ね巻きの端は細く切られ桜皮で継じられている。底板は径90~95mmの柾目の円板で厚さ6mmを計る。他に同様の大きさをもつ柾目の底板が2枚ある。すべてSD11出土である。

箸=上部が欠損するが残存長88mmを計る。面取りがなされ断面は歪んだ円形である。端部は先細りとなっている。SK 3出土である。

木槌状木製品=椀の底に棒状の円筒形の握りがつく形をもち、長さ210mmを計る。外面はすべて削り成形で棒状の端部は削り落とされている。椀形の上面は皿状に窪んでおり滑面となっている。棒状部は長さ120mm、断面は径50~55mm程の不整な円形である。横木取りである。用途不明遺物で、SK 8出土である。

## VII. 今泉遺跡出土火葬骨について

札幌医科大学医学部 石田 肇

人骨は、乳白色で亀裂が走り歪みがあるなどの点から考えて、かなりの高温でしっかりと火葬された可能性が高い。

### 4区1号火葬遺構

成人。おそらく1体分。残存する部位は、頭蓋骨の破片、椎骨、足と手の指、手根骨など。下顎の小白歯の歯冠2点、第3大臼歯と思われる歯根が1点、同定できる。左下顎小白歯の近遠心径は7.7mmであり、男性日本人平均より大きく、火葬のためいくらか収縮したことを考え合わせると、この個体の性別は男性と判断できる。

### 5区2号焼骨出土地点

成人。1体分。残存部位は、頭蓋骨の破片、大腿骨などの長骨、指の骨、歯根など。指骨の大きさから考えると、男性である可能性が高い。

### 6区3号焼骨出土地点

成人。性別不明。1体分。残存部位は、頭蓋骨の破片、大腿骨、肋骨、椎骨、指の骨など。

## VIII. 総括とまとめ

### 1. 遺構の構成について

今回の調査において弥生時代から近世にわたる遺構群を検出した。中心となるものは中世の遺構群であるが、他の時期の遺構も散見される。以下、各時期ごとに記述する。

[1期] 弥生時代 樹形圓式期の土器埋設遺構を1基確認した。検出状況から土器棺墓と考えられる。なお、79年の調査では樹形圓式期の土坑を1基確認している。今回までの調査で多くの土器資料が出土しているが、主体となるものは樹形圓式のものである。土器の出土量から推察して後世の搅拌により遺構群が破壊されている可能性がつよい。

[2期] 古墳時代 塩釜式期のSK 5 土坑を1基確認した。検出状況から廃棄穴と考えられる。土坑内からは多くの土師器等の遺物が出土したが、祭祀品と考えられる二重口縁の超大型の壺や赤彩された土器が含まれている。79年の調査では住居跡の可能性をもつ竪穴遺構1基及び土坑4基が確認されているが、塩釜式期のものは土坑2基のみと単体遺構の域を出す全体として不明な点が多い。

[3期] 平安時代 SD17溝跡・SK 9 土坑各1の確認で構成等不明である。SD17堆積土上部に灰白色火山灰が確認されている。79・81年の調査では住居跡・溝跡・井戸跡・土坑・掘立柱建物跡などが検出され、灰白色火山灰降下頃から平安時代末頃までの集落の展開が把握されている。

[4期] 中世 屋敷及び城館成立以後の遺構群である。検出層・重複関係・方向性・出土遺物から下記の遺構群に分けた。なお、柱穴が数多くみられ建物跡等が想定されたが不定となっている。

1群 屋敷に伴う遺構群と考えられ、方画な配置をもつ溝跡群で構成される。溝跡群に重複があり、1a群-SD 8・12・14・15溝跡群と1b群-SD 3・4・5・6溝跡群のグループに分けられる。前者が時間的に先行するが規模や形態が類似し同一の性格をもつものと考えられる。出土遺物が少なく時期が判然としないが13~14世紀頃と判断される。なお、SD16溝跡はSD11溝跡下部での確認であり1群に属するものと判断した。

2群 SK 8 土坑・SD 2 溝跡・火葬遺構がある。SK 8は規模・形態から土倉と考えた。土師質土器・陶器・青磁・木製品など多くの遺物があり、底面からは15世紀頃の常滑窯の壺が出土している。火葬遺構はSD11溝跡との関係から当群と判断した。

3群 城館を区画する溝跡群で構成される。SD 1・SD11溝跡があり、SK 2 井戸跡・柱穴及びピットが含まれる。SD11は幅7mを計る東西に延びる大溝で、位置から判断して外堀を形成する溝跡と考えられる。なお、溝跡・井戸跡には炭化物や灰が確認され特徴的である。不定

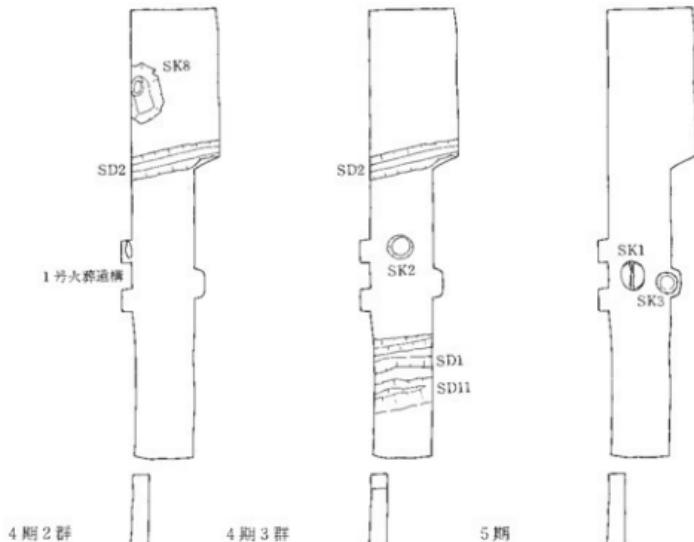
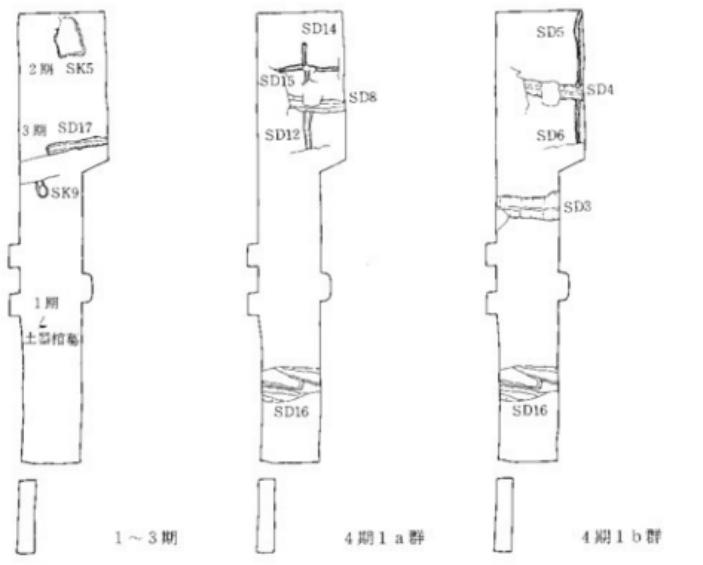


図22 各期構造変遷

とはなったが建物跡となる柱穴・ピット群は SD 1 の北側に集中する。遺物には古瀬戸の皿・天目茶碗などがあるが、土師質土器擂鉢・石臼が特に多く出土している。なお、石臼はすべて破片資料で側面部を中心に破壊されているように判断され、炭化物や灰とともに注意される。15~16世紀頃の年代が想定される。2群とした SD 2 は SD11 と遺物の接合関係があり3群の時期まで併存を考えた。

〔5期〕近世以降 SK 1 土坑・SK 3 井戸跡、柱穴及びピットがある。遺構等の構成は不明であるが、SK 3 には志野丸皿が出土しており近世初頭頃の年代が考えられる。

## 2. SK 5 土坑出土の土師器について

当遺構出土の土師器は、器形の特徴等から東北地方南部地域における土師器編年の「塩釜式」に位置づけられる土器群である。近年、塩釜式の土器は丹羽・次山・辻の各氏(註1)により再検討が行われ細分・変遷が提示されている。当土坑出土の土器類は一括廃棄という性格をもつ資料である。絶対出土量に較べ復元・図示資料数が少ない点はあるが、塩釜式土器の中での位置づけをみておきたい。器種には壺(A1・A2)、器台、甕(Ala・Alb)、台付甕、壺(A1・A2a・A3)、甑の6種が確認されているが、器形がほぼ把握できる壺と甕についてみてみる。

壺 A1 類は底部が四面の平底状で、体部はやや偏平気味で、口縁部は上方へきつく立ち上がる器形をもつ。口縁部高と体部高、器高と口縁部径の比率が1対2程で最大幅は口唇部に位置する。調整は口縁部がハケメの後ヨコナデ、体部はヘラミガキである。全体的に丁寧な作りである。類似する資料として野田山遺跡10号住居跡出土の壺II類がある。口縁部がやや開き気味ではあるが法量・法量比ともほぼ同じ値を示し、調整もほぼ同じである。

壺 A2 類は口縁部が大きく外方へ内窩気味に立ち上がり口唇部が直立気味になる器形をもつ。ハケメの後内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。体部は欠損するが口縁部に較べて極めて小さくなるものと判断される。内窩気味に長く立ち上がる口縁部が特徴的であるが、類似する資料として色麻古墳群第11号住居跡出土の壺、昭和北遺跡 SI 2 住居跡出土壺II a 類がある。法量的に両資料とも大型品である違いはある。

甕 A1 類は超大型の二重口縁のもので、体部はやや下膨れの球形で、頸部が垂直に立ち上がり、口縁上部が内窩気味に立ち上がり椀状となる。口縁端部内面にやや丸みをもつ断面三角形の粘土帯が巡り口唇部が肥厚する。外面には継位の棒状浮文が貼付される。このような器形をもつ土器、特に口縁端部内面を肥厚させる大型の甕は、東海・駿河地方における「大席式」とされる土器に類例を求めることが可能かと考えられる(註2)。ただし、実測図での比較ではあるが肥厚する部分の形態に相違がみられる。大席式の甕は肥厚部分が内側に強く突き出すのに対し甕 A1 類は丸く膨らんだ形となっている。従来の塩釜式土器にはみられない形態をもつという点からみて、大席式土器の影響を受けているものと判断されるが、肥厚部分に関しては退

化・形骸化がみられると判断される。なお、同様な特徴をもつ土器が名取市鶴巻前遺跡から出土している。口径44cmを計る大型の壺で刻目をもつ棒状浮文が貼付されている。口縁端部は逆三角形状に粘土帯が巡り内側が肥厚する。胎土は精選され形態等から壺 A1 類に先行するものではと考えられる。

以上、二器種の特徴を略述したが個体数を含め資料不足の感は否めないが、壺の特徴を中心みると当土器群は次山氏の編年での 2 段階、丹羽氏の編年での第 II A 段階に位置づけられるものと考えられる。

### 3.まとめ

調査の結果、弥生時代から近世にいたる遺構・遺物が発見された。大きく 1 ~ 5 期の時期に分けられ、長い期間にわたり生活の場としての使用が確認された。

検出された遺構群のなかで中心をなすものは 4 期とした中世の城館跡である。調査範囲が極めて狭く詳細は明らかではないが、今泉城最南部に位置する遺構群と判断される。他の期の遺構群は数も少なく点的な確認で詳細は不明である。今後の調査に期待される。

古墳時代の土坑から出土した超大型の土師器壺は駿河地方を出自とする大崩式土器の影響をもつものと考えられ伝播等注意される。

### 註・参考文献

- (註 1) 丹羽 茂 1985 「今泉城跡」宮城県文化財調査報告書第104集  
次山 淳 1992 「塙釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班 — 埋蔵文化財研究会15周年記念論文集一』  
辻 秀人 1993 「東北南部における古墳出現期の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』  
日本考古学協会
- (註 2) 比田井克仁 1993 「東国における外来土器の展開」『斯古論聚 — 久保哲三先生追悼論文集一』  
比田井氏より実測圖での観察となるが、壺 A1 類は大崩式に系譜を持つものと考えられ、鶴巻前遺跡出土の壺に比べるとより標識が進み在地化したものと考えられるとのご教示をいただいている。
- 藤原信彦 1980 「今泉城跡」仙台市文化財調査報告書第24集  
佐藤 洋 1983 「今泉城跡」仙台市文化財調査報告書第58集  
須藤 誉 1984 「東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『宮城の研究』  
氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会  
白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』多賀城跡調査研究所  
木村浩二他 1982 「郡山遺跡II」仙台市文化財調査報告書第38集  
古川一明 1983 「色麻古墳群」宮城県文化財調査報告書第95集  
須田良平 1992 「野田山遺跡」宮城県文化財調査報告書第145集  
佐藤 淳 1994 「昭和北遺跡」仙台市文化財調査報告書第186集  
大友 透 1994 「仙台東道路関係遺跡 — 鶴巻前遺跡一」名取市文化財調査報告書第33集  
富士宮市教育委員会 1981 「月の輪遺跡群」富士宮市文化財調査報告書第1集

出土地点	種別・器種	産地	年代	備考	図・番	写・番
SK 1 検出面	陶器 土瓶	大堀相馬	19世紀	土瓶の口 (遺物番号43)		
埋土 磁器	皿?	肥前	江戸		(50)	
埋土 土師質土器	擂鉢				(123)	
SK 2 検出面	陶器 土瓶	大堀相馬	幕末	山水文土瓶の蓋	(34)	15-12
1層 青磁	碗	龍泉窯系	14世紀	無文碗 玉縁	(49)	15-15
3層 陶器	甕	在地?	13~14世紀		(35)	14-6
5層 陶器	皿	古瀬戸	16世紀	灰釉	(145-1)	15-2
〃 陶器	甕?	在地?			(145-2)	
〃 陶器	甕	在地			(145-3)	
5層下部	土師質土器	擂鉢	15~16世紀		(167-1)	
〃 瓦質土器	香炉		15~16世紀	雷文と渦巻の文	(167-2)	16-11
SK 3 1層	瓦質土器	火鉢		脚あり 三足?	(124)	
2層 陶器	鉢?	岸旗系?	17世紀前半?	灰釉	(40-1)	15-11
〃 陶器	皿?	古瀬戸	16世紀?		(40-2)	
5層上部 陶器	丸皿	志野	17世紀初		(169-1)	15-9
〃 磁器	碗	中国	16世紀後半~17世紀初	柒付碗	(169-2)	15-14
5層下部 陶器	丸皿	志野	17世紀初	繪明皿に使用	(176)	15-8 71-17
SK 8 埋土	土師質土器	皿	中世		(85-1)	16-2
〃 土師質土器	皿				(85-2)	
〃 青磁	碗	龍泉窯系	13世紀?	劃花文	(146)	
〃 陶器	甕	在地	13世紀?		(164)	14-5 71-16
2層 陶器	鉢	在地	13~14世紀	磨面あり	(154)	14-8
〃 陶器	甕?	常滑	13~14世紀	押印あり	(178)	14-4
3層 陶器	鉢	白石窯系	13~14世紀		(147-1)	14-7
〃 陶器	鉢	在地	13~14世紀	磨面あり	(147-2)	
底面 陶器	甕	常滑	15世紀		(171)	14-1 71-15
SD 1 検出面	陶器 甕?	白石窯系	13~14世紀		(24-1)	
〃 陶器 甕?	在地		13~14世紀		(24-2)	
〃 土師質土器	鉢		15~16世紀		(24-3)	
〃 土師質土器	擂鉢		15~16世紀	20-1と接合	(24-4)	
〃 土師質土器	擂鉢		16世紀		(24-5)	
〃 土師質土器	鉢				(24-6)	
〃 瓦質土器	火鉢?		16世紀	脚あり 三足?	(277)	16-12
埋土 白磁	碗	中国	14世紀?		(276)	15-16
SD 2 埋土 陶器	天目茶碗	古瀬戸	中世		(83)	
〃 土師質土器	擂鉢		15~16世紀	片口 157-1と接合	(20-1)	
〃 土師質土器	擂鉢				(20-2)	
SD 3 埋土 陶器	甕?	在地	13~14世紀		(111)	
SD 4 埋土 青磁	碗?	龍泉窯系	13世紀?		(132)	
SD 11 1層 土師質土器	鉢		15~16世紀		(181)	
2層 土師質土器	擂鉢		15~16世紀	片口 262-1と接合	(157-1)	16-9 71-20

表1 陶器・磁器類観察表(1)

出土地点	種別・器種	座地	年 代	備 考	図・番 写・番
S D11 2層	土師質上器 鉢鉢		15~16世紀	(157-2)	
II	土師質土器 鉢鉢		15~16世紀	(157-3)	
II	土師質土器 鉢鉢		15~16世紀	(157-1)	16-8
II	土師質土器 鉢			(157-5)	16-7
II	土師質土器 盆		15~16世紀	余切り	(189-2)
II	土師質土器 盆	中世	ロクロ使用	(189-3)	16-4
II	土師質土器 盆		15~16世紀		(198)
II	陶器 鉢	在地	13~14世紀	(157-4)	
II	陶器 盆	古瀬戸	16世紀	灰釉	(157-6)
II	陶器 小豆	古瀬戸?	中世	鉄輪 耳付	(187)
II	陶器 天日茶碗	古瀬戸?	16世紀		(189-4)
II	陶器 瓢	白石窯系	13~14世紀		(190)
II	青磁 瓢	龍泉窯系	13世紀?		(189-5)
3層	陶器 梅瓶	古瀬戸	中世		(191)
II	陶器 瓢?	在地	中世		(206)
4層	陶器 瓢	在地	13~14世紀		(201)
S D16 墓土	陶器 瓢	常滑			(227)
2層	陶器 瓢	常滑			(220)
底面	陶器 瓢	常滑		断面に磨面有り	(260)
表揮	磁器 盆	明治		上絵付 色絵皿 金彩	(144)
	白磁 盆	近代			(182)
陶器 瓢?	大堀相馬	19世紀			(193-1)
磁器 瓢?	瀬戸?	明治~大正	染付 鋼板軒写		(193-2)
陶器 鉢	江戸末			鉄輪	(197)
4区西壁	土師質土器 鉢?		中世		(247-1)
磁器 鉢?	肥前?	江戸			(247-2)
陶器 瓢?	大堀相馬	18~19世紀			(247-3)
磁器 瓢?	肥前	江戸	染付		(247-4)
5区西壁	磁器 盆	肥前	18世紀		(249-1)
陶器 茶碗	大堀相馬	18世紀以降	灰釉		(249-2)
南壁	土師質上器 鉢			龜甲文スタンプ	(252)
南側トレンチ	土師質土器 鉢鉢	15~16世紀			(262-1)
磁器 瓢	19~20世紀				(267)
基本層 I・II層	瓦質土器 香炉	15~16世紀	雷文と渦巻の文	(1)	16-10
陶器 瓢?	白石窯系	13~14世紀			(3-1)
陶器 鉢?	岸窯系?	17世紀	鉄輪		(3-2)
陶器 盆	古瀬戸	15世紀	緑釉盆		(3-3)
				(3-4)	15-1
				(3-5)	
4・5区I・II層	土師質土器 盆	14世紀以降	余切り		(10-1)
陶器 鉢	在地	13~14世紀			(10-2)
陶器 大鉢	唐津?	江戸	長石釉		(10-3)

表2 陶器・磁器類觀察表(2)

出土地点	種別・型種	產地	年代	備考	図・番	写・番
4・5区I・II層	磁器 瓷	江戸～明治		(10-4)		
	陶器 土瓶 大堀相馬	幕末～明治		(10-5)		
7区I層	陶器 鋼鉢 美濃	17世紀	鉄釉	(9-1)		
	陶器 鉢? 美濃	17～18世紀	鉄釉	(9-2)		
	陶器 盆 古瀬戸	16世紀	灰釉	(9-3)		
	磁器 瓶 中国	16世紀	染付? 端反	(9-4)		
2・3区II層	陶器 壺? 白石窯系	13～14世紀		(6-1)		
	陶器 壺? 常滑			(6-2)		
	陶器 大鉢 吉津	17世紀	二彩	(6-3)	15-10	
4・5区II層	陶器 燈明皿 提?	19世紀	鉄釉 芯受けあり	(7-1)	15-13	
	陶器 瓶 大堀相馬	18世紀以降	灰釉	(7-2)		
	陶器			(7-3)		
	磁器 盆? 肥前	江戸	染付	(7-4)		
田層	陶器 盆 古瀬戸	14～15世紀	灰釉 ハケぬり?	(2-1)	15-6	
	陶器 盆 古瀬戸	16世紀前半	内面模様化粧	(2-2)	15-3	
	陶器 壺 在地	13～14世紀		(4)		
	陶器 壺? 営治	中世		(5)		
	陶器 壺? 常滑?	中世		(212)		
1区粗層	土師質土器 盆	中世	糸切り	(36)	16-1	71-19
	陶器 壺? 白石窯系?	13～14世紀		(60-1)		
	青磁 瓶 鹿泉窯系	13～14世紀	蓮弁文飾	(60-2)		
	陶器 壺? 白石窯系	13～14世紀		(66)	14-9	
	陶器 小壺 常滑	13世紀?		(72)	14-2	
	陶器 鉢 在地			(74-1)		
	土師質土器 鋼鉢	15～16世紀		(74-2)		
	陶器 鋼鉢 在地	13～14世紀		(134)		
	陶器 壺? 在地	13～14世紀		(248)		
1・2区田層	青磁 瓶 鹿泉窯系	12～14世紀	雲文鏡	(113)		
2区粗層	陶器 壺? 白石窯系	13～14世紀		(59-1)		
	陶器 鉢 白石窯系	13～14世紀		(59-2)		
	陶器 瓶 古瀬戸	14～15世紀	灰釉	(61-1)	15-5	
	陶器 壺 在地	中世		(67)		
	陶器 壺 在地	13～14世紀		(233-1)		
	陶器			(233-2)		
3区粗層	土師質土器 鉢?			(76)	16-6	
4区田層	陶器 壺? 営滑	中世		(99)		
4・5区田層	陶器?	瓶?		(8)		
5区田層	陶器 壺? 常滑	中世		(98)		
	陶器 壺? 在地	13～14世紀		(110)		

表3 陶器・磁器類観察表(3)

写 真 図 版

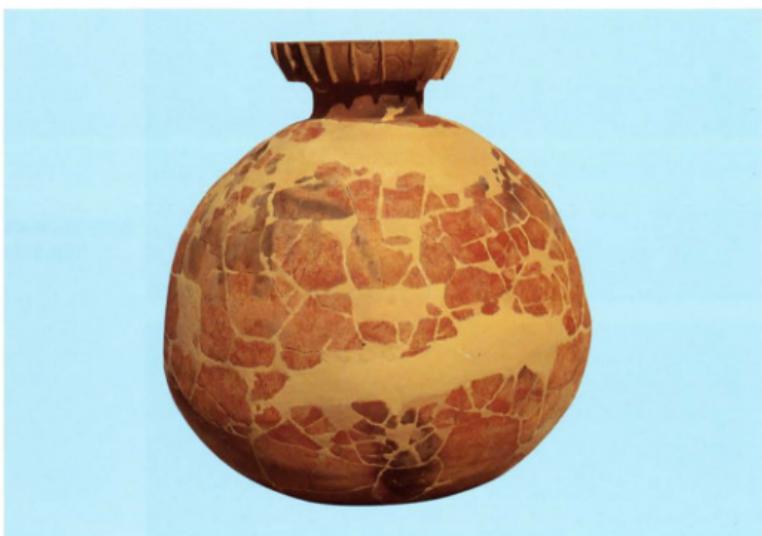


写真1 SK5土坑出土 土師器壺



写真2 SK8土坑出土 中世陶器壺（常滑産）

写真3  
今泉遺跡周辺航空写真  
(昭和32年撮影)



写真4  
今泉遺跡周辺航空写真  
(平成4年撮影)



写真5  
調査区全景航空写真





写真6 柱穴群検出状況（北→）

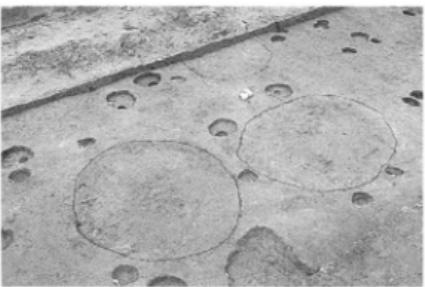


写真10 SK 1～3 土坑検出状況（北西→）



写真7 土坑・柱穴掘り下げ状況（南→）



写真11 SK 1～3 土坑掘り下げ状況



写真8 IV層面遺構完掘状況（北→）



写真12 SK 1 土坑断面

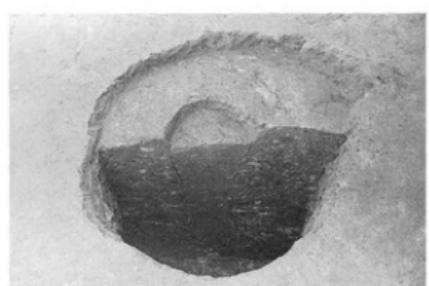


写真9 ピット31断面

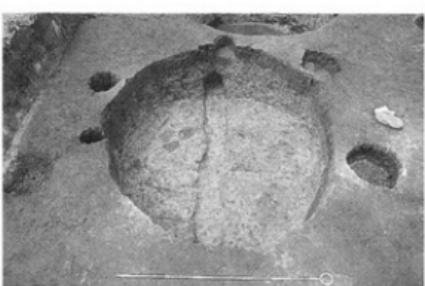


写真13 SK 1 土坑完掘状況（南→）



写真14 SK 2 井戸跡断面



写真18 SD 1 溝跡完掘状況（東→）



写真15 SK 2 井戸跡下部断面



写真19 SD 1 溝跡断面



写真16 SK 3 井戸跡断面



写真20 SD 1 溝跡西壁断面



写真17 SK 3 井戸跡下部断面



写真21 SD 1・11溝跡状況（北西→）



写真22 S D11溝跡南辺検出状況（東→）



写真26 1号火葬遺構完掘状況



写真23 S D11溝跡断面



写真27 SK 4 土坑完掘状況（西→）



写真24 S D11溝跡断面・底面状況



写真28 SK 4 土坑断面



写真25 1号火葬遺構検出状況（東→）



写真29 SK 5 土坑完掘状況（北→）



写真30 SK 5 土坑断面



写真34 SK 7 土坑断面



写真31 SK 5 土坑遺物出土状況（南西→）



写真35 SK 8 土坑完掘状況（南→）



写真32 SK 5 土坑遺物出土状況（北西→）



写真36 SK 8 土坑断面



写真33 SK 6 土坑完掘状況（東→）

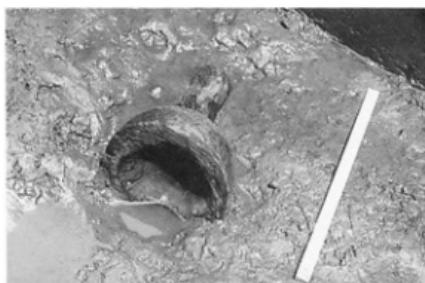


写真37 SK 8 土坑木製品出土状況



写真38 SK 8 土坑西壁断面



写真42 SK 12 土坑完掘状況



写真39 SK 9 土坑断面



写真43 SK 12 土坑断面



写真40 SK 9 土坑完掘状況（東→）

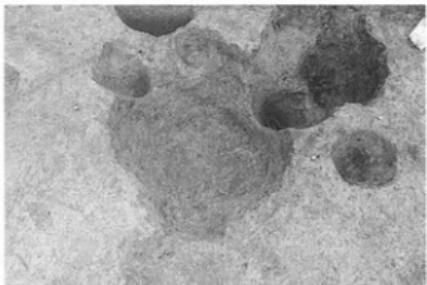


写真44 SK 13 土坑完掘状況（南→）



写真41 SK 11 土坑断面



写真45 SK 13 土坑断面



写真46 SK 14土坑西壁断面



写真50 SD 3溝跡完掘状況（東→）



写真47 SD 2溝跡完掘状況（西→）



写真51 SD 3溝跡断面

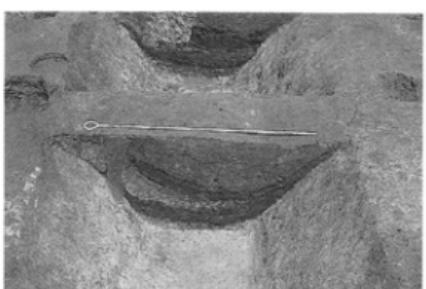


写真48 SD 2溝跡断面



写真52 SD 4溝跡完掘状況（西→）

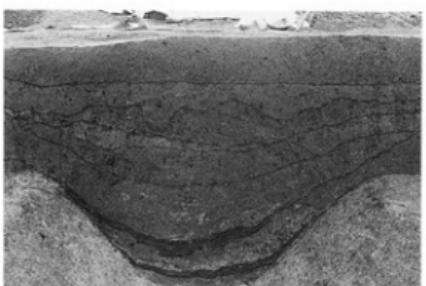


写真49 SD 2溝跡西壁断面



写真53 SD 4・8溝跡東壁断面



写真54 SD 5・6溝跡検出状況（北→）



写真58 SD 9・10溝跡状況（東→）



写真55 SD 5溝跡断面



写真59 SD 10溝跡断面



写真56 SD 6溝跡断面



写真60 SD 12溝跡断面



写真57 SD 8溝跡完掘状況（西→）



写真61 SD 14溝跡断面

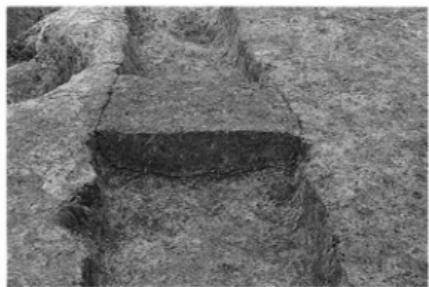


写真62 SD 15溝跡断面（西侧部）



写真66 SD 17溝跡断面



写真63 SD 16溝跡完掘状況（東→）



写真67 SD 2・17溝跡東壁断面



写真64 SD 16溝跡西壁断面



写真68 土器埋設遺構検出状況（北→）



写真65 SD 17溝跡完掘状況（西→）



写真69 土器埋設遺構断面



1



2



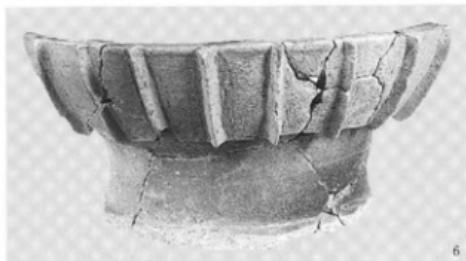
3



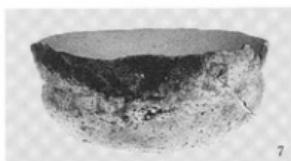
4

5

1 図9-4 4 図9-6  
2 図9-3 5 図9-5  
3 図9-2



6



7



8



9



10 写真70 出土遺物1(弥生土器・土師器)

6 図11-3 9 図10-6  
7 図10-1 10 図10-7  
8 図12-1 11 図10-5



11



12



13

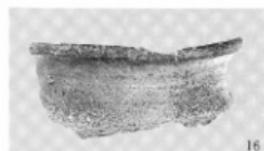


14

12 図10-4 13 図10-10  
14 図13-3



15



16



17

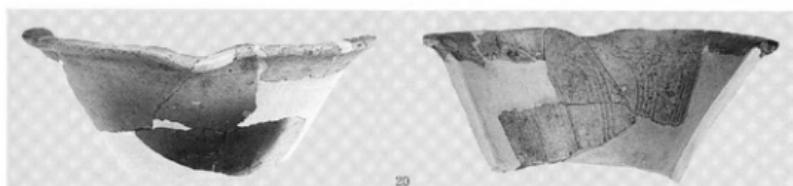
15 図14-1 17 図15-8  
16 図14-5



18



19



20

18 図16-3 19 図16-1 20 図16-9



21



22



23



24

21 図17-1  
22 図17-4  
23 図17-3  
24 図17-8

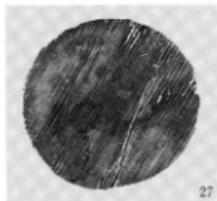
写真71 出土遺物2(土師器・陶器・土師質土器・土製品)



25



26



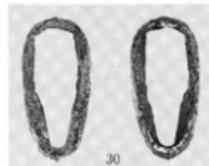
27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37

29 図18-3、4、5、1、2

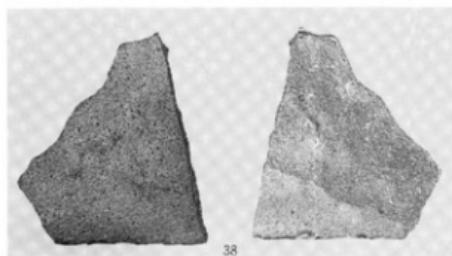
-8、9、6、7

30 図17-25 34 図17-22

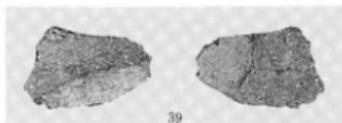
31 図17-10 35 図17-18

32 図17-13 36 図17-16

33 図17-24 37 図17-15



38



39

38 図18-10

39 図18-11

## 写真72

出土遺物3(木製品・古銭・金属製品・石器)



40



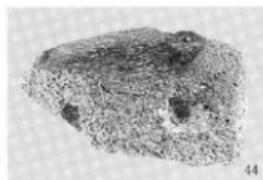
41



42



43



44

40 圖19-5

41 圖19-4

42 圖20-2

43 圖21-1

44 圖20-3

写真73 出土遺物4(砾石・臼)

---

仙台市文化財調査報告書第185集

## 今 泉 遺 跡

1994（平成6）年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市青葉区国分町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷 (株) 東 北 プ リ ン ト

仙台市青葉区立町24-24 TE1.263-1166

---

